

クロモンマグソコガネ *Aphodius variabilis* Waterhouse

【選定理由】

全国的に減少が指摘されている種で、主に平地の牛馬糞や犬糞、人糞に依存している。近年の衛生環境の改善により、平野部の牧場は減り公園等でも放置された犬糞が減ってきているので、再発見は容易ではないだろう。

【形態】

体長 4.9～7.3mm。上翅に黒紋を持つが斑紋の変異も大きい。背部は扁平。頭部は前縁が裁断状でわずかに湾入し、小点刻を散布する。前胸背板は点刻をやや密に密布する。上翅は外縁部や後方に毛を装い、小点刻を散布する。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市に古い記録があるが、近年では矢作川河川敷の記録が 1 例あるのみ。

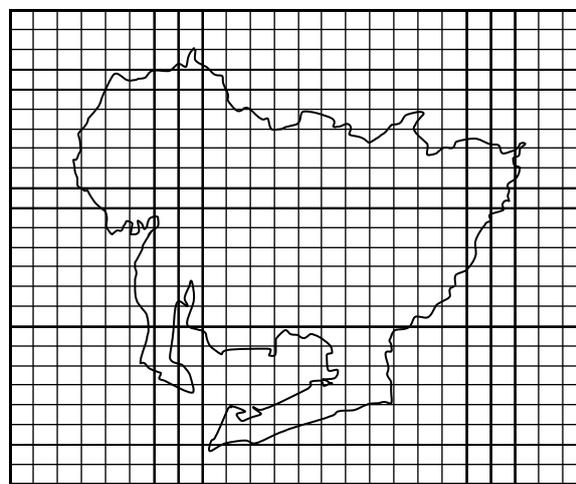
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、中国、中央アジア、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は晩秋から早春にかけて活動する。河川敷や放牧地などの開けた環境に生息し、牛、犬、人の糞などに集まる。放牧地からは減少したが、近年河川敷の犬糞から見つかっている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

矢作川河川敷で採集された個体を最後に見いだされていない。近年の平野部河川敷環境では、犬の飼い主のマナー向上により餌資源だった犬糞が減り、本種の生息基盤は脆弱になっていると思われる。

【保全上の留意点】

近年の衛生環境の改善や、飼い主のマナーの改善が本種の衰退の原因であり、保全は簡単でない。

【関連文献】

- 川井信矢ほか, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第 1 巻 食糞群 1: 114. 昆虫文献六本脚.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 342. 愛知県.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 46. コガネムシ研究会.

イガブチヒゲハナカミキリ *Stictoleptura igai* (Tamanuki)

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では設楽町の原生林から知られているだけである。

【形態】

体長 18~25mm のやや大型のハナカミキリ。黒色で、上翅は赤褐色。触角は黒色と白褐色のまだらとなる。近縁のブチヒゲハナカミキリとは、オスでは後けい節が強く湾曲すること、メスでは前胸背が赤くなることで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町（竹内ほか，1980）からのみ知られる。

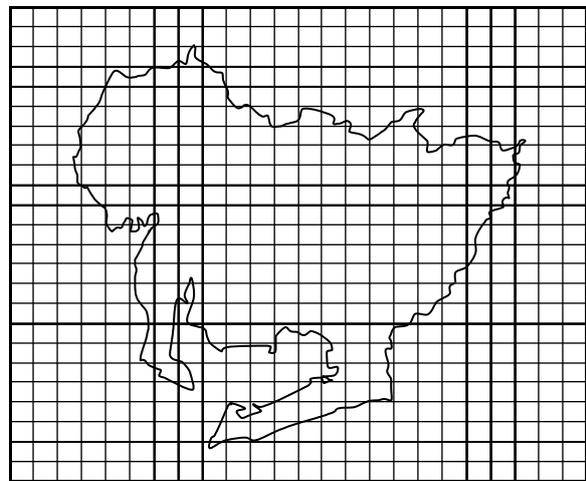
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ブナ帯からトウヒ帯にかけて生息する。成虫は 7~8 月に出現し、ノリウツギなどの花に集まる。幼虫の寄主植物は、トウヒやサワラなどの針葉樹で、大木の中腐れから幼虫が発見されている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

原生林環境の減少により生息地は減少している。近年でも少数ながら採集情報がもたらされており、細々ながら生息を続けているようだ。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

設楽町には本県では珍しいモミ・ツガの群落が知られている。本種はその原生林内でツガを寄主植物として利用していると考えられ、この原生林を代表する昆虫の一つと位置づけられる。

【引用文献】

竹内克豊・原田猪津夫・松野更一，1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

【関連文献】

佐藤正孝ほか，1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ヒメヨツスジハナカミキリ *Leptura kusamai* Ohbayashi et Nakane

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では豊田市（旧稲武町）、設楽町および豊根村（旧富山村）の3カ所のみから知られていたが、最近の生息情報がもたらされていない

【形態】

体長12~16mm。中型の細長いハナカミキリ。黒色で上翅には4本の黄色の帯がある。よく似た普通種のヨツスジハナカミキリとは、後肢が細長く、後けい節が湾曲しないことから区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町）（佐藤ほか, 1990）、設楽町（竹内ほか, 1980）および豊根村（旧富山村）（竹内ほか, 1980）の3カ所が知られるにすぎない。

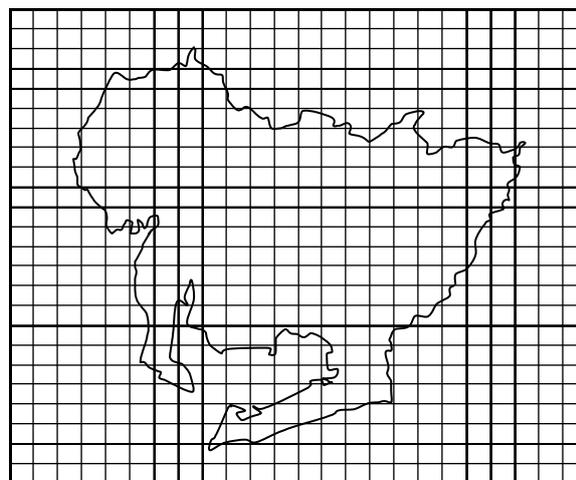
【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州の太平洋側の山地に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

自然度の高い森林に生活している。生息地の多くは太平洋型のブナ林である。成虫は7~8月に出現し、ノリウツギやリョウブなどの花に飛来するが、原生林内の日陰の花を好み、林縁部の日向には見られない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1990年代以降の生息情報は明らかに減少している。ブナ原生林の減少と林内の乾燥化の影響が考えられる。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、路肩の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【引用文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

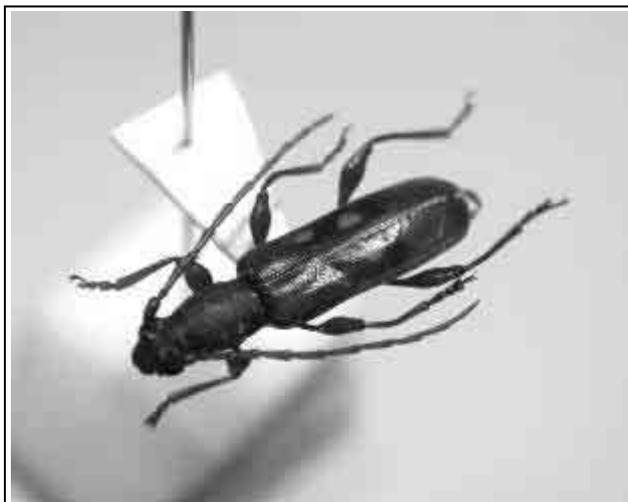
ヨツボシカミキリ *Stenygrium quadrinotatum* Bates

【選定理由】

1970年代までは平地から低山地にかけて普通であったが、1980年代になって減少傾向が知られるようになり、現在では発見が極めて困難になっている。

【形態】

体長8.5～13.5mm。黄褐色～赤褐色のやや細型のカミキリムシで、上翅中央に4つの顕著な明色紋がある。触角はオスでも体長を僅かに越える程度。



豊田市, 1998年, 蟹江昇 採集,
長谷川道明蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

ほぼ全県内から記録があるが、1990年以降の記録は豊田市（旧旭町）のみ。

【国内の分布】

沖縄県を除く日本のほぼ全土に分布する。

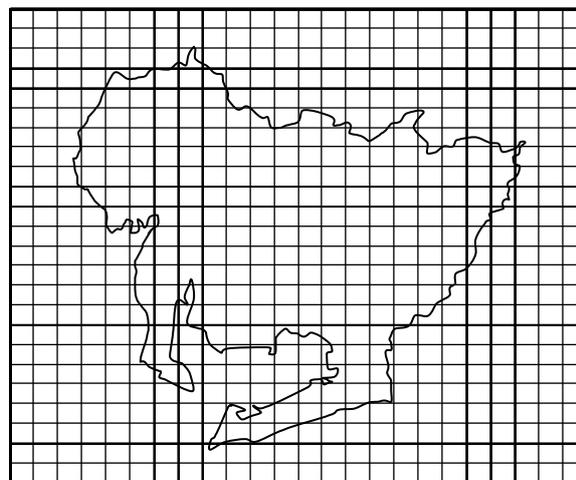
【世界の分布】

台湾、朝鮮半島からインドシナまで分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

平地から低山地に生息する。成虫は6～7月に出現し、クリの花に好んで集まる他、灯火にもよく飛来する。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

1960年代には名古屋市内でも珍しくなかったと言われるが、1990年代以降、生息情報がもたらされているのは豊田市（旧旭町）のみ。豊田市（旧旭町）では1997年と1998年にそれぞれ1個体ずつ確認されている。本種の減少の要因としては、薪が燃料として需要がなくなったため、本種の重要な繁殖の場であった薪置き場が無くなったこと。また、それと平行して薪の生産現場であった雑木林の管理放棄による荒廃や宅地造成などによる消失があげられる。

【保全上の留意点】

明確な減少の要因が確定できないため、保全上の留意点をあげるのは困難であるが、里山の雑木林の荒廃を防ぐ手だてが必要であろう。現在生息が確認されている豊田市（旧旭町）周辺での詳細な実態調査を進め、保全対策を立案する必要がある。

【関連文献】

蟹江 昇ほか, 2001. 旭町の甲虫目. 旭町の昆虫: 89-173. (財)旭高原自然活用村協会.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler)

【選定理由】

「レッドデータブックあいち 2002 動物編」では、本種は絶滅危惧種として掲載されなかった。また、現在環境省からもレッドリストには掲載されていない。しかし、愛知県の本種の最近の記録を調べると、著滅していることが明らかである。

【形態】

もともと普遍的にみられるイチモンジセセリに一見類似する暗褐色のセセリチョウ。イチモンジセセリとは属も異なる。近縁種のチャバネセセリによく似ているが、後翅裏面中央の中室部に明瞭な銀白紋をもつことから容易に本種と同定できる。前翅にある♂の性標はチャバネセセリほど明瞭ではない。♀がやや大型、腹部が太いことを参考にして♂♀を区別する。春型は夏型に比しやや小さい。

【分布の概要】

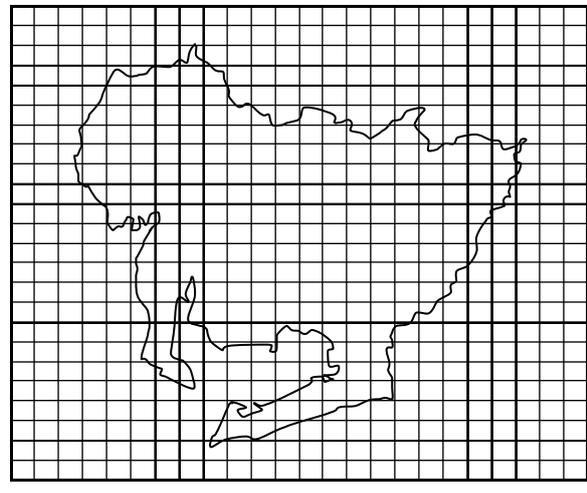
名古屋市内（守山区、千種区、天白区、名東区）、犬山市、瀬戸市、春日井市などの尾張地方、および豊田市、新城市、北設楽郡（東栄町、豊根村）、豊橋市などの三河地方から採集記録があり、名古屋市内でも同時に数頭が採集されるなど、かつては分布も広く、個体数も決して少なくないものと思われていた。

岐阜県でも大垣市の標高 10m から、飛騨市（旧大野郡清見村）の標高 900m まで知られる。

日本では、北海道を除く、本州、四国、九州、に広く生息地が知られ、佐渡島、隠岐島、淡路島などの島嶼からも記録があるが、常に見られるといった生息地を聞かない。北限は青森県の竜飛岬、南限は鹿児島県佐多町と指宿市。海岸でも記録がある。垂直分布は 2,000m にも及ぶとされる。地理的分布は普遍的であるが、近年激減し、まれな種類となったと考えられる。

国外では、朝鮮半島から中国東北部にかけて生息する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本州中部の主な生息地は、標高 300~800m 付近の明るい草地である。広い草原には少なく、適度の起伏、水系、疎林、林道などをもつが混在する草地を好む傾向が見られる。市街地の住宅の庭で発見されることもあり、コキマダラセセリのような草原性セセリチョウとは生息環境が異なる。

4~6 月と 7~8 月の年 2 回発生する。本種の幼虫の主な食草はススキやチガヤなどであり、これらも分布が広い。従って、本種の生息地の特性を明示することがむづかしい。成虫は多くの草花を訪れたり、地上で吸水したりする。飛び方はチャバネセセリやイチモンジセセリなどに比し、敏捷でない。

幼虫は食草の葉を筒状にした巣を造り、その中に潜んでいる。蛹化前に巣を離れ、食草の葉に窪みを作り、そこで蛹化するため、半裸の状態で見つかる。多くのセセリチョウが幼虫越冬であるのに対し、本種は蛹で越冬する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県では近年の観察例が激減した。これは日本全国に共通する現象と思われるが、詳細については報告がない。生息地や食草は特定された条件が見出されず、減少の要因は気候の変化、酸性雨や農薬などの化学的要因などが示唆されるが、目下のところ不明としか言えない。

【保全上の留意点】

全国的に本種の生息状況を詳しく調べ、減少の要因を明らかにすることが根本的な保全に繋がるものと考えられる。農薬の散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【関連文献】

福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑, (IV): 269-274. 保育社, 大阪.
高橋 昭ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

スジボソヤマキチョウ *Gonepteryx aspasia nipponica* Bollow

【選定理由】

かつて本種は、本県の山間部から平地にかけて広く分布していたが、個体数は多くはなかった。成虫の記録は、1976年以降32年間ないまま現在に至っている。

【形態】

前翅長 35mm 程度。♂の翅表は鮮黄色、♀は黄白色をしている。ヤマキチョウ（本県では迷蝶としての記録がある）と紛らわしいが、♂♀ともヤマキチョウに比べて翅は薄い感じで、後翅裏面第7脈がヤマキチョウのように他の脈に比べて膨らんでいないことで区別される。また、前翅前縁から外縁および後翅外縁はヤマキチョウのように濃い桃色を帯びていない。本州中部の山地産の成虫は、翅のとがりが強い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村（旧豊根村、旧富山村）、設楽町（旧設楽町、旧津具村）、新城市（旧新城市）、豊田市（旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町）、瀬戸市、岡崎市や名古屋市など丘陵・山間部から平地にかけての記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。中部以南の暖地では、主として山地に見られ平地で観察されることは稀である。

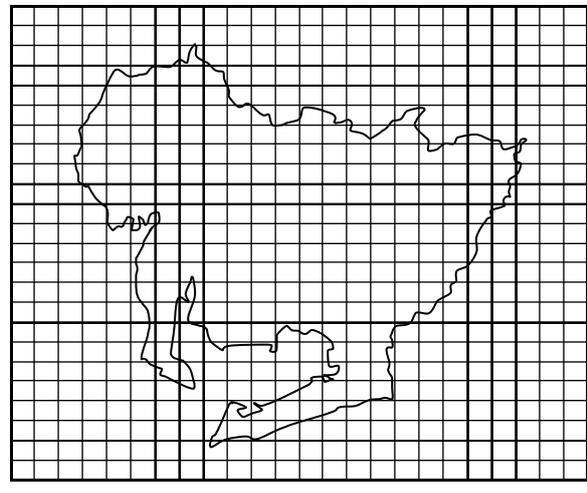
【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

生息範囲は、疎林や林縁から落葉広葉樹林の内部まで、地形も平坦地、緩斜面や急斜面など広範囲に及んでいる。年1回の発生で、6~7月に羽化し、短期間活動して仮眠にはいり、秋再び現れて活動する。成虫で越冬する。春に出現する個体は、翅の裏面の汚れが目立つ。卵は、食樹の細枝や茎に1~数个並べて産み付けることが多い。北設楽郡でクロウメモドキ科のクロウメモドキに産卵することが確認されている（高橋，1984）。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

ここ32年間は成虫が確認されないまま現在にいたっている。かつて生息していた旧旭町の現地を今回訪れてみたが、食樹のクロウメモドキは林縁や林内に点々と確認できるものの、その多くは混交林の繁茂により生育不全となっている。1980年代からいずれの産地でも姿を消しているその理由不明であるが、食樹の生育不全をみると、混交林の繁茂・管理放棄が本種の激減と無関係でないことが窺い知れる。

三重県では、食樹が生育していても本種が確認できない（三重県環境森林部，2006）という。また、かつて多産した鈴鹿山脈北部の藤原岳でも激減して久しいという。

【保全上の留意点】

本種の食樹は、クロウメモドキ科に絞られるので、三河山間部での生育のよいクロウメモドキ生育地を定点観察拠点として、長期のモニタリングを実施して、保全のためのデータを積み上げるのが望ましい。かつて多数の記録があるのに、新知見がでてこないことを考慮すると、絶滅している可能性もあると思われる。

【引用文献】

三重県環境森林部，2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物: 250. (財)三重県環境保全事業団，三重県。
高橋 昭，1984. チョウ類. 愛知の動物: 121. 愛知県郷土資料刊行会，名古屋。

【関連文献】

高橋 昭ほか，1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県。
巢瀬 司ほか，2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会，東京。

ハヤシミドリシジミ *Favonius ultramarinus* (Fixsen)

【選定理由】

本県では、1960年に豊田市（旧旭町）で始めて記録された（小林, 1961）。本種は、豊田市旭地区のカシワの生育する地域に生息に限られる。近年、混交林の繁茂や管理放棄に伴いカシワの生育が不全となり、カシワそのものが減少するに従い成虫の個体数も減少している。1997年から3年間にわたって旧旭町全域でチョウ類の見直し調査が行われたが、最終年度の1999年に徐々に越冬卵が再確認された（高橋ほか, 2001）が、環境の変化がさらに進み生息は一層厳しくなっている。

【形態】

前翅長 21mm 程度。エゾミドリシジミに似るがやや大型である。♂の前翅外縁は丸みを帯びる。♀の前翅表の灰白色の斑は、オオミドリシジミ属の中ではもっとも強くあらわれる。近似種とは、♂の表面黒縁の太さなどで判別するが、熟練を要する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧旭町）の太田・八幡・榎本・伊熊・明賀・伯母沢地区など、限られた地域に生育するカシワに依存して生息している。そのため、この地域が本県の唯一の分布地となっている。

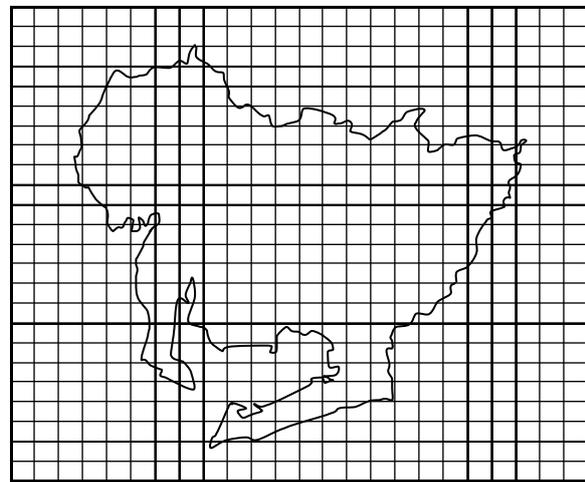
【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布する。四国には産しない。食樹のカシワの分布に制約されるため、その産地はいずれの地方においても局地的である。三重県からは確実な記録がない。

【世界の分布】

ロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部および中部～西部に分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

カシワは、豊田市旭町内の限られた地区に点在して生育している。しかし、大木は伐採され、周辺は繁茂が進むなどのため、カシワは成長不良となり生息環境は悪化している。

本種は、年1回、6月中～7月上旬に発生する。つねにカシワの樹林に生息し、群生するが多い。卵は食樹の1～2年枝上に1、2個ずつ産卵される。卵で越冬する。幼虫には多型があり、黒褐色・赤褐色・灰褐色のものが見られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本県では、1960年に初めて確認されているもののそれ以降もカシワ林の伐採や混交林の繁茂のため、個体数は減り続けている。林縁に残ったカシワに依存して、細々と生息している。

近隣の矢作川を挟んだ北部に位置する岐阜県串原町、明智町、上矢作町にも本種は生息するが、当地と同じようにカシワの伐採や混交林の繁茂や管理放棄で個体数は減っている（巢瀬ほか, 2003）。

【保全上の留意点】

カシワに依存しているので、まずカシワの保全が必要不可欠である。限られた狭い地域であることも考慮して周辺全体の多様性を意識した環境保全が望ましい。

【引用文献】

小林広成, 1961. ハヤシミドリシジミ, ヒョウモンモドキ三河に産する. 佳香蝶, 13 (46): 94.

巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 253. (財)旭高原自然活用村協会.

【関連文献】

白水 隆, 2006. ハヤシミドリシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 112. 学習研究社, 東京.

クロシジミ *Niphanda fusca* (Bremer et Grey)

【選定理由】

本県の生息地は、東三河の 4 地域に限られる。旧鳳来町では、1995 年ごろまでは確実に発生していた。

ここ 10 数年来現在に至るまで公式記録はない。全国的にも減少が報じられている。

【形態】

全翅長は 20mm 程度。♂♀の翅形の差異は著しく、♂の翅型は尖るが、♀では幅広く丸みが強い。♂の翅表は暗紫色に光る。♀は一様に暗褐色を呈するが、前翅表に白斑を現す個体も稀ではない。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧作手村、旧新城市、旧鳳来町）、設楽町（旧津具村）の 4 地域から記録されているにすぎない。近年まで、旧鳳来町では継続して生息が確認されていたが、環境の変化により生息が確認できなくなった。最近の公式記録はない。

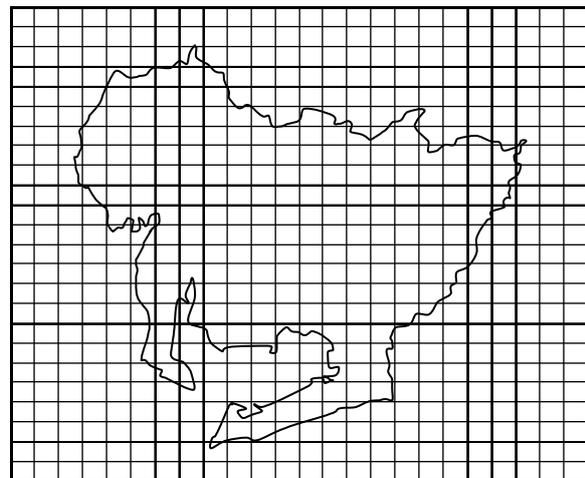
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布するが、一般に局地的である。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、シベリアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

愛知県では、丈の低いコナラなどが生えている裸地が生息地として確認されている。本種と密接な関係を有するクロオオアリが、このような環境に好んで巣を設けている。

1950 年に永山文昭氏により、初めて特異な生態が解明されている。年 1 回、6~8 月に発生する。♂は、樹上を活発に飛び回ることが多い。♀は、コナラなどの樹木や草に数卵産み付ける。その場所は、アブラムシの寄生した付近が選ばれる。孵化した幼虫は、アブラムシを訪ねるクロオオアリによって巣の中に運び込まれる。これは、クロオオアリが本種の幼虫の腹節の蜜腺からでる蜜を特に好むからである。幼虫はアリの巣のなかで冬を越し、翌年の晩春に蛹になり巣の中で羽化する。遅れて羽化した個体は、クロオオアリに食べられる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息地の草原やそれに連なる疎林の植生遷移や管理放棄もあり、背丈の低い樹木混じりの明るい草地が減少するとともにクロオオアリの巣作りもなくなり、それに連動して本種も発生しなくなって久しい。ここ 10 数年来、現在に至るまで公式記録はない。この現象は全国的といわれている。なお、三重県の鈴鹿山地では、荒れ地的な環境に本種が生息（河本, 2004）し、近年は、むしろ記録数が増えている傾向にあるという。一方、丘陵部の生息地は、生息に適した雑木林の消失で減少が著しいという（三重県環境森林部, 2006）。山地での生息地が知られていない本県については、更なる継続調査が必要である。

【保全上の留意点】

クロオオアリは、伐採されて数年経つような草原と疎林が連なる明るい裸地を好むので、このような環境の確保が必要不可欠である。併せて継続した間伐の実施などによる環境保全管理・復元が望まれる。

【引用文献】

河本 実, 2004. 鈴鹿山系(三重県)のクロシジミ近況報告. ひゃくとりむし, (251): 3004-3006.
三重県環境森林部, 2006. 三重県レッドデータブック 2005 動物: 250. (財)三重県環境保全事業団, 三重県.

【関連文献】

白水 隆, 2006. クロシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 135. 学習研究社, 東京.

ミヤマカラスシジミ *Strymonidia mera* (Janson)

【選定理由】

本県では、1974年に豊田市（旧稲武町）で始めて記録された（北原, 1977）。本種は、クロウメモドキ科を食樹とするが本県内では少ないこともあり、産地は豊田市（旧稲武町）、東栄町の2地域に局限される。長野県などの分布の南西限となっている。北半球北部に広く分布するカラスシジミ属の県内唯一の種でもある。

近年、本種は、産地の混交林の繁茂により食餌植物の生育不全・枯死などにより、その個体数が激減している。

【形態】

前翅長は18mm程度。色彩は全体に黒褐色で斑紋はない。♂♀の色彩は大差ないが、♀はやや大型、地色は淡色、尾状突起は長い。♂は前翅前縁に楕円形の顕著な性標を持つが、♀はこれがない。近似種のカラスシジミ（本県未記録）とは、後翅裏面の白帯が点線状で外縁に平行であること、また、ベニモンカラスシジミ（本県未記録）とは、前翅表面に赤紋がないことで容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町）、東栄町のごく限られた地域に分布する。県内には、食樹のクロウメモドキが少ないので、新産地の発見の可能性は低いと思われる。この2地域以外は未記録となっている。

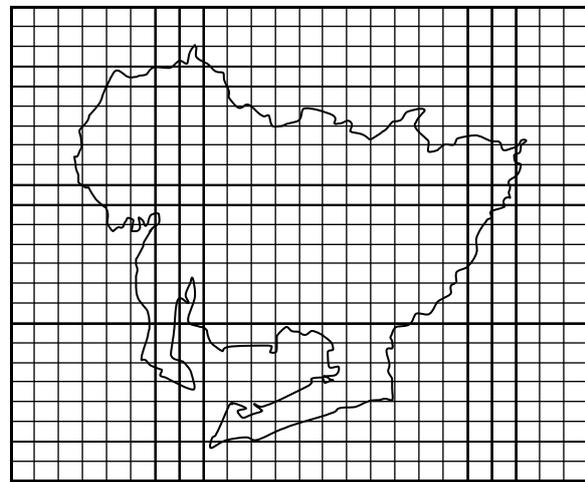
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道は渡島半島南部にのみ産地が知られている。東北地方より中部地方にかけては各地に産地が多い。近畿地方では伊吹山・藤原岳周辺に分布するが、それより岡山県まで大きな分布空白域がある。四国、九州では高地に分布するが稀である。

【世界の分布】

本種は日本固有種とされている。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は年1回7~8月に発生する。低山地~山地の林内の暗い環境を好み、花にもよく集まる。成虫は食餌植物の小枝の分岐部や短枝の基部に1~数個の卵を産み付ける。幼虫の食樹であるクロウメモドキ科の植物が県内では少ないこともあり、産地は局限される。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年、生息地の混交林の繁茂が進み、間伐などの定期的な管理が放棄され食樹の生育環境が悪化傾向にある。場所によっては、陽が当たらなくなり枯死する食樹も有り、個体数は激減している。

近隣の産地である三重県藤原岳は、かつて幼虫がたくさん生息していたが、現在では激減している。静岡県西部からは未記録（諏訪, 2003）になっている。

【保全上の留意点】

食樹であるクロウメモドキ周辺の適度な間伐による日照の確保が早急に必要である。なお、産地がごく限られた地域であるため、採卵・採集の自粛が望まれる。

【引用文献】

北原幹郎, 1977. 愛知県北設楽郡稲武町でミヤマカラスシジミを採集. 佳香蝶, 29 (109): 11.
諏訪哲夫, 2003. 静岡県の蝶類分布目録: 1345. 静岡昆虫同好会, 静岡.

【関連文献】

白水 隆, 2006. ミヤマカラスシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 130-131. 学習研究社, 東京.
巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

オオイトトンボ *Cercion sieboldii* (Selys)

【選定理由】

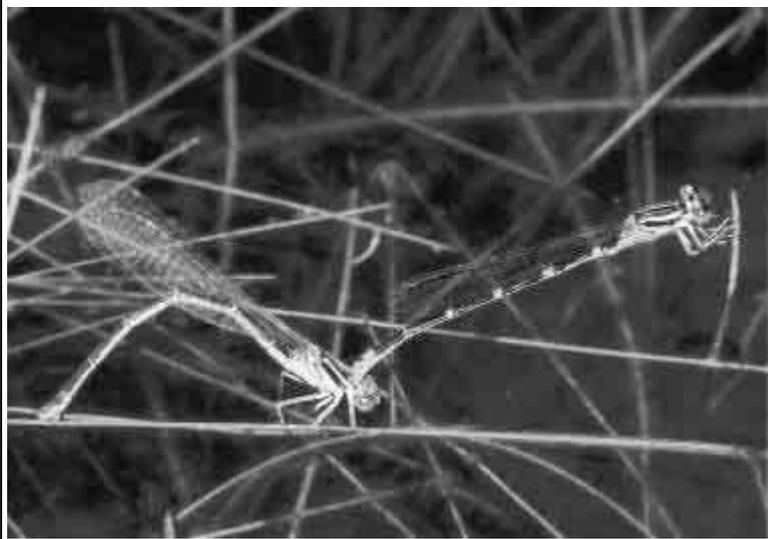
旧市町村単位の絶滅率は82%、現存数は5.5であり、絶滅危惧ⅠB類に相当する（現存数の端数は資料編：評価方法の詳細を参照）。

かつては平野部から山間部にかけて広範囲で見られたが、現在は三河山間部に局限されており、今回新たに追加された。

【形態】

♂は水色と黒、♀は黄緑色と黒を基調と体色のイトトンボである。愛知県には同属が4種生息しているが、本種は眼後紋が洋なし型をしている点で区別できる。

和名ではオオイトトンボとされているが、同属他種と比べてそれほど大きいわけではない。



♂♀。新城市作手，2007年7月29日，高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河にかけて平野部を中心に31市町村（旧市町村単位）で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

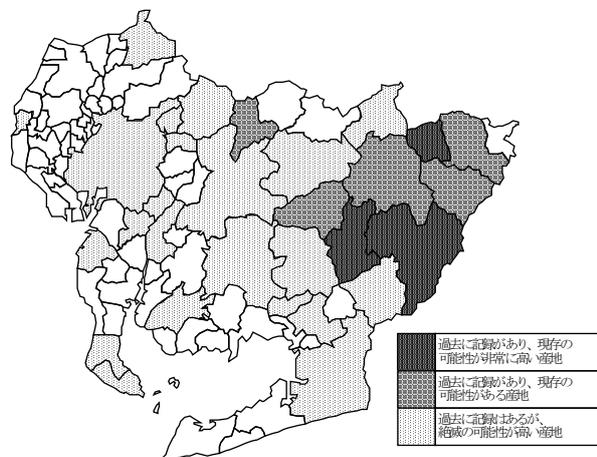
台湾に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、平地から山間部にかけての比較的自然度の高い池沼や水田で見られることが多い。未熟成虫は、発生地からあまり移動せず、付近の草むらで見られることが多い。幼虫は、水生植物につかまっている。

6～8月を中心に成虫が多く見られ、暖地では年2回発生することもあると思われる。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張および西三河では確実な産地がほぼ消滅し、東三河の新城市（旧作手村）や設楽町（旧津具村）などで現存するに過ぎない。

水域の汚濁や植生の消失など環境変化にもろく、同属の中では真っ先に姿を消すことが多い。近年は、オオクチバス・ブルーギルといった外来魚による影響も大きいようであり、それら肉食魚と本種が共存している例は確認されていない。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止
- 2) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保

【特記事項】

同属のクロイトトンボ・セスジイトトンボ・ムスジイトトンボは止水だけでなく、河川の緩やかな流れにも生息できるのに対し、本種は止水にしか生息できないことも本種の減少に影響していると推測される。

ベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は66%、現存数は9.5であり、絶滅危惧Ⅱ類に相当する(現存数の端数は資料編：評価方法の詳細を参照)。

前回のレッドリストでは絶滅危惧ⅠB類としたが、その後名古屋周辺で再確認される例が相次ぎ、現存産地数が増えたため、今回は絶滅危惧Ⅱ類に選定された。

【形態】

本州原産のイトトンボでは唯一、♂の全身が朱赤色となる種であり、和名もそれに由来する。



♂. 長久手町三ヶ峯, 1992年6月20日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河にかけての平野部を中心とした28市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、平地から丘陵地にかけての大規模な改修が行われていない抽水・浮葉植物の豊富な古い溜池で見られることが多い。未熟成虫は、付近の草むらで見られることが多いが、相当の分散力を示す例もあると推測される。幼虫は、水生植物につかまっている。基本的に1年1化と思われる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張平野部では2000年頃には長久手町などわずかな生息地しか確認できなかったが、その後、名古屋市や一宮市(旧尾西市)などで再確認例が相次いだ上、稲沢市、瀬戸市、豊田市等で新産地が発見されている。新産地の中には比較的新しい池での確認例も含まれる。

水域の汚濁や植生の消失などの環境変化にもろく、イトトンボ科の中では真っ先に姿を消すことが多い。またオオクチバスやブルーギルによる食害も、本種の生存に大きなダメージを与えている。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫 / 成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止
- 2) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保

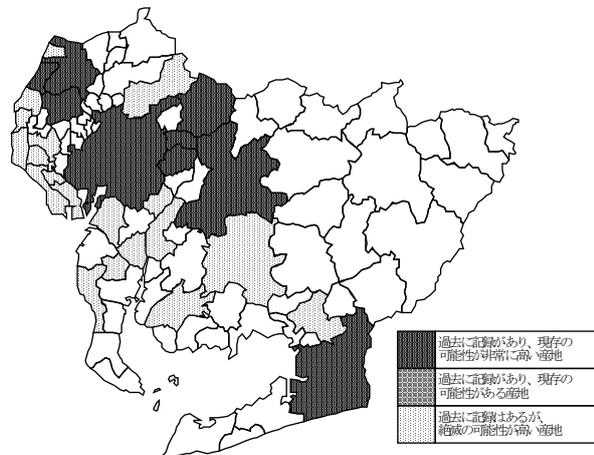
【特記事項】

前回のレッドデータブックにおいて、長久手町の池沼では密生する水草により外来魚の侵入が防がれ、本種は生き延びているが、予断を許さないと指摘しておいた。2006年の幼虫調査では100頭以上確認できたが、2007年の調査ではわずか数頭に激減しており、今後の成り行きが懸念される。

【関連文献】

高崎保郎, 2003. 愛知県のベニイトトンボ(第2報). ため池の自然, (38): 1-8.

県内分布図



フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は53%、現存数は9.5であり、絶滅危惧Ⅱ類に相当する（現存数の端数は資料編：評価方法の詳細を参照）。

【形態】

体色は黒地に黄色の条斑を持つ小型のサナエトンボである。胸側の第1側縫線の黒色条が完全に上縁に達することで、同属他種と区別できる。

和名は胸の第1・第2側縫線を2本のスジと見立てたことに由来する。



♂. 豊田市八草町, 2007年5月11日, 安藤 尚 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平地から丘陵地にかけての20市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州中部から九州南部にかけて分布し、壱岐等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

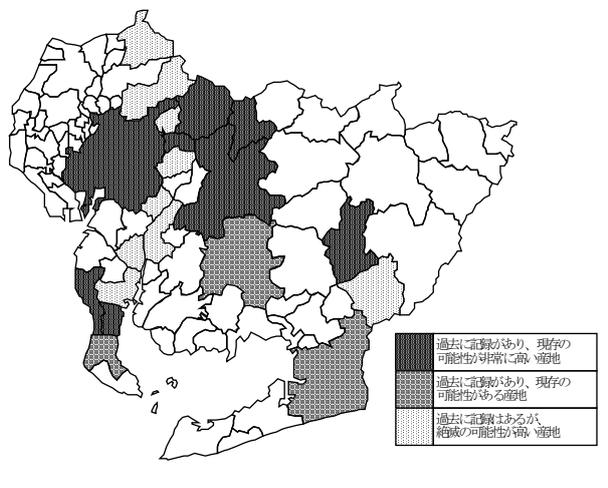
日本特産種である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけての古い溜池で見られる。未熟成虫は、生息地を遠く離れることはないようで、発生地周辺で観察される。幼虫は、浅く泥に潜って生活している。泥との結び付きが強いようで、一見同じような池でも、泥が堆積していないと発見できない。

4月中旬頃から羽化が始まり、成熟成虫は5月を中心に見られるが、一産地でのピークは短い。幼虫は野外での観察や飼育結果から、成虫になるまでに通常2年かかる。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張では長久手町や瀬戸市、そして知多半島の常滑市等、西三河では豊田市や豊田市(旧藤岡町)等、東三河では新城市(旧作手村)に点々と現存しているにすぎない。

幼虫は水質汚濁に非常に弱い上、改修による底質環境の改変も絶滅の引き金となる。さらに近年は、オオクチバス(ブラックバス)・ブルーギルによる食害の影響も否定できない。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地・林地の確保
- 3) 幼虫/成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

本種は西日本を主たる分布域とし、愛知県は分布のほぼ東限にあたる。

オグマサナエ *Trigomphus ogumai* (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は53%、現存数は9であり、絶滅危惧Ⅱ類に相当する。



♂. 長久手町岩作, 2001年5月11日, 安藤 尚 撮影

【形態】

邦産コサナエ属の最大種である。同属他種とは、翅胸前面に太いL字形斑のほか、その外側に細い前肩条と小さい黄色点があり、♂では尾部付属器の背面に突起があることで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部とその周辺域の19市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州中部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

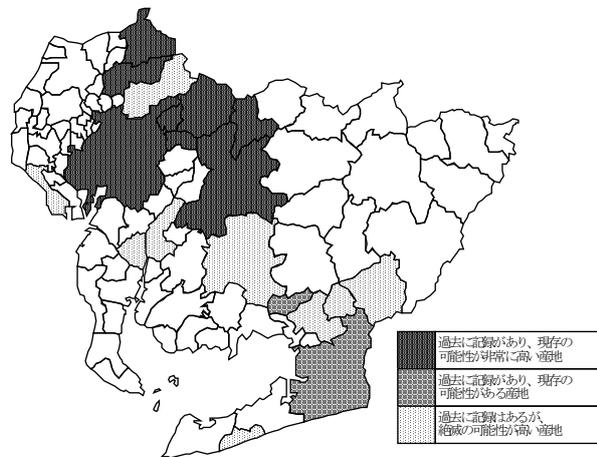
日本特産種である。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけての泥底のある古い溜池や、それにつながる緩流などに見られる。未熟成虫は、生息地を遠く離れることはないようで、発生地周辺で見られることが多い。幼虫は、泥底に浅く潜っている。

本種は4月上・中旬から羽化し、5月を中心に成熟成虫が見られる。幼虫は野外での観察や飼育結果から、成虫になるまでに通常2年を要する。

県内分布図



【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつて尾張では春に出現する止水性のサナエトンボとして普通であった本種は、北東部丘陵地の瀬戸市や犬山市、名古屋市周辺に点々と生き残っているに過ぎない。西三河でもかつての岡崎平野周辺の産地は失われ、豊田市等にものみ現存する。東三河ではほとんどの産地が失われ、豊橋市等で細々と生存している可能性があるに過ぎない。

フタスジサナエと同様、本種幼虫は水質汚濁や改修による底質環境の改変に非常に弱く、さらにオオクチバス(ブラックバス)・ブルーギルによる食害の影響も無視できない。本種やフタスジサナエなど平地に住む止水性のトンボの壊滅は、人間による自然破壊を如実に物語っている。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地・林地の確保
- 3) 幼虫/成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

本種は西日本を主たる分布域とし、愛知県は分布のほぼ東限にあたる。和名はトンボ分類学の先駆者である小熊桿博士に因む。

ネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は38%、
現存数は8であり、絶滅危惧Ⅱ
類に相当する。



♂. 長久手町三ヶ峯, 2008年6月17日, 大野 徹 撮影

【形態】

アオヤンマに類似した黒みの強い大型のヤンマである。ハネの基部に橙色斑があり、またヨシ原に生息することと併せて「根赤+葦」と名付けられた。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平地から丘陵地にかけての13市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州中部から九州中部にかけて分布し、対馬等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、谷戸や湿地上を黄昏飛翔(早朝または夕方に飛翔)するのが見られる。未熟成虫は、晴れた午前中に開けた谷間や林縁などの高所で摂食飛翔するのを他県で観察している。幼虫は、林縁にある小池や湿地などの浅い水たまりの植物につかまっている。

成虫は6月頃より羽化し、成熟成虫は7～8月を中心に生殖行動を行なう。1年1化である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張地方では2000年代以降も名古屋市北

東部から記録が散見されていたが、新産地の報告を追いかけるように宅地等の造成が進行し、生息地が埋め立てられる例が続いた。武豊町や常滑市でも新産地が発見されたが、耕地整理やアメリカザリガニの大発生によって生息地は失われた。東三河では豊橋市周辺に現存している。

本種は大きな池沼に生息することはあまりなく、時には干上がってしまうような浅い小さな池や湿地を好む傾向にある。それらは丘陵地の林縁にあることが多いので、都市近郊では、そのような目立たない水域は、造成により埋め立てられやすく、大きな絶滅要因となっている。

【保全上の留意点】

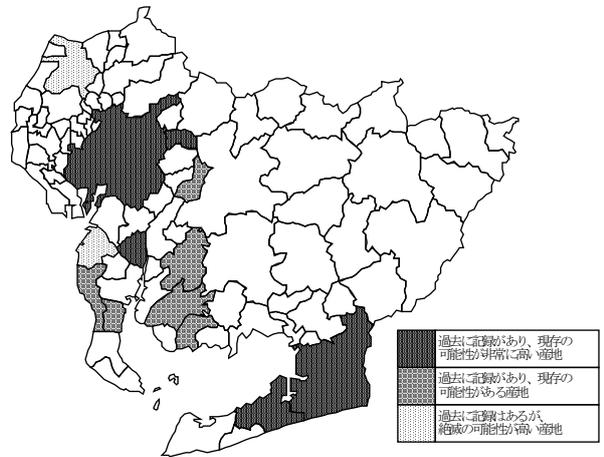
- 1) 幼虫の生息域である林縁の小池・湿地の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林の確保
- 3) 幼虫を捕食するアメリカザリガニの排除

【特記事項】

本種幼虫は地図に掲載されないような小さな水域を好むため生息地の探索はかなり困難である。さらに成虫は黄昏飛翔性が強いので、日中の探索では非常に発見しづらい。

全国的に見ても著しく分布の限定されるヤンマとされてきたが、近年他県では都市近郊の放置された廃田や自然公園などで発見されるケースが散見される。

県内分布図



アオヤンマ *Aeschnophlebia longistigma* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は72%、
現存数は9であり、絶滅危惧Ⅱ
類に相当する。



♂. 長久手町三ヶ峯, 2004年6月5日, 高崎保郎 撮影

【形態】

全身が鮮やかな黄緑色で、ずん胴型の、やや大型のヤンマである。

和名は全身が黄緑 (= 青) 色であることに由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部を中心とした32市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

北海道中部から九州中部にかけて分布し、対馬等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけてのヨシなどの抽水植物が多生する池沼で見られる。未熟成虫は、ほとんど移動しないようで、成熟成虫と同様、ヨシ原などで見られることが多い。幼虫は、ヨシなどの植物につかまっている。

成虫は5～6月に羽化し、成熟成虫は7月を中心に生殖行動を行ない、8月頃まで見られる。幼虫で越冬し、翌年羽化する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張では平地を中心に丘陵地まで広範囲に

生息していたが、生息環境の悪化/消失により産地はかなり限定されている。尾張西部では弥富市(旧弥富町)などに、東部丘陵地では長久手町や日進市で見られるに過ぎない。西三河では確実な産地はほとんどない。東三河では豊橋市に現存しているが、多くの産地は失われたようである。

本種はヨシやガマが密生した池沼を代表するトンボである。しかし、平地にあるそのような池沼は埋め立てられやすく、また護岸工事等により植生が破壊されたり、釣り堀化されたり、さらには不法投棄によって水質が悪化するなど様々な環境破壊により、本種は多くの産地を減らしている。またアメリカザリガニの大繁殖に伴い、本種が絶滅する例も確認されており、肉食外来種の影響も本種の生存に大きな影響を与える。

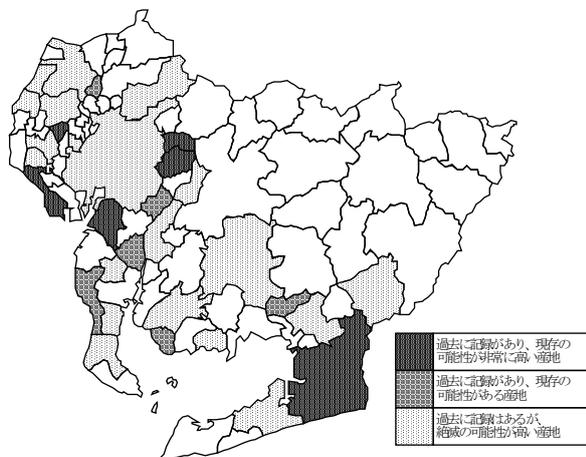
【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域、および成虫の産卵場所となる抽水植物の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保
- 3) 本種が生息する池沼の生態系を破壊する外来魚やアメリカザリガニの移入禁止

【特記事項】

同属のネアカヨシヤンマが黒っぽい体色をして、主に薄暗い朝夕を中心に活動するのに対し、本種は明るい黄緑色の体色をして、日中を中心に活動する点是对称的である。

県内分布図



ハネビロエゾトンボ *Somatochlora clavata* Oguma

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は29%、現存数は8.5であり、絶滅危惧Ⅱ類に相当する（現存数の端数は資料編：評価方法の詳細を参照）。

【形態】

全身が鈍い金属光沢のある暗緑色で、邦産のエゾトンボ属中最大種である。エゾトンボとは腹部第4節以降に黄色斑がないことで区別できる。

和名は後翅の広いエゾトンボの一種という意味である。



♂. 長久手町一の井, 1991年9月23日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の主に丘陵地に分布する。また渥美半島の一部にも飛び離れて分布しており、これまでに12市町村（旧市町村単位）で記録されている。

【国内の分布】

北海道中部から九州南部にかけて分布し、佐渡島、対馬等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

韓国に分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地の細流を伴う湿地や、落ち葉等が堆積した水流の緩い小河川等に見られ、林内の細流上で縄張り飛行することが多い。未熟成虫は、発生地付近の開けた空間や路上をゆっくりと飛行する。幼虫は、落ち葉や石などのすき間に潜り込んでいることが多いが、流れの速い部位や深過ぎる部位では見られない。

成虫は6～7月頃に羽化し、成熟成虫は8～9月を中心に見られる。成虫になるまでに2年程度かかると思われる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

尾張から西三河にかけての東部丘陵には点々と現存する。東三河では豊橋市などに現存しているが、いずれの産地も個体数は多くない。

本種は二次林を流れる小川に生息する例が多く、その水位低下や干上がりは、本種の生存に大きなダメージを与える。すなわち健全な二次林があつてこそ、本種は生育できるのである。本種の減少は、二次林の荒廃を現していると推測される。

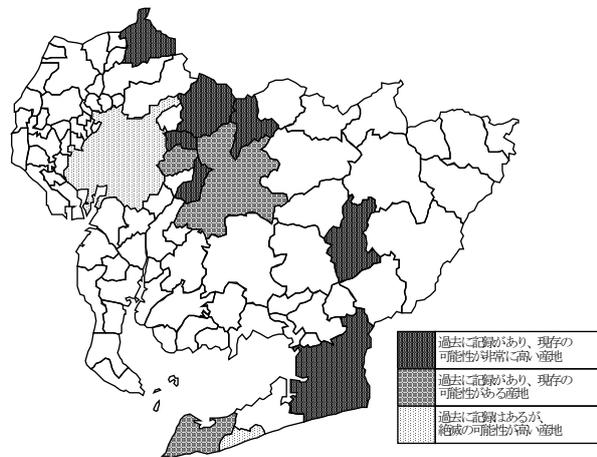
【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域である小川及びその集水域を涵養する二次林の保全
- 2) 成虫の休息域である水域周辺の林地の確保

【特記事項】

狭義のエゾトンボ科の中では珍しく、幼虫が流水に生息する。

県内分布図



ハマスズ *Dianemobius csikii* (Bolivar)

【選定理由】

本種は、草がまばらに生えるようなきれいな砂浜・砂地に住む。県内での分布記録は 2 例しかなく、しかもこうした環境は減少しつつあり、本種の存続が懸念される。

【形態】

小型の地表性のコオロギ。体長は♂・♀とも 7～9mm。全体に白褐色で全身に黒褐色の斑点模様を散布。♂・♀とも翅はあるが一般に短翅。後脚腿節には上面から見ると三つの黒褐色紋が顕著。生息地の砂浜の砂粒と酷似した体色・模様のため、静止している個体を見つけ出すのはむずかしい。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島の伊良湖岬と豊橋市表浜の砂浜から記録されているのみ(石津・荒川, 1953; 長谷川, 1991)。

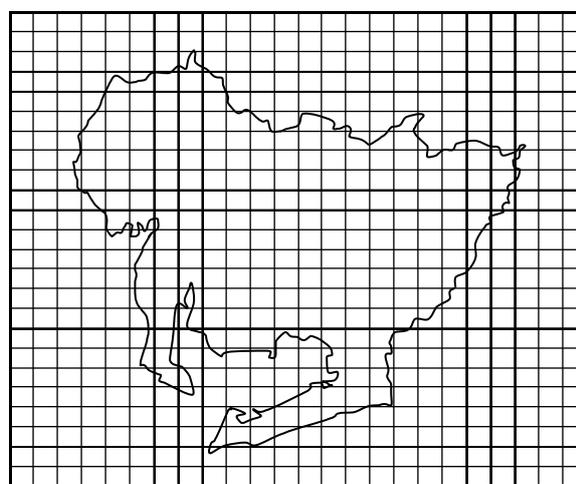
【国内の分布】

本州、四国、九州。南西諸島(徳之島以北)。

【世界の分布】

韓国、中国北部、台湾にも生息するという(市川ほか, 2000)。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

県内での既知の生息地は海岸砂浜のみであるが、他地方では内陸の河原にも生息するという。きれいな砂浜の陸側で、まばらに草の生えているような所を好む。土を被ったり汚染されたりした砂浜には生息しない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

伊良湖岬では 1952 年に記録されているが、その後の記録は無い。同地は観光客が多く、海辺や砂浜への立ち入りが多い。豊橋市表浜では、1990 年当時は本種の個体数はさほど少くはなかったというが(長谷川, 1991)、その後の記録は見られない。2006 年 9 月現在の豊橋市での現地調査でも見出すことはできなかった。ここは、現在ウミガメ保護のため自動車の乗り入れが禁止されており、本種の存続にも好都合となっている。

なお、本種は一般的な蒐集の対象とはなっておらず採集圧による減少はない。

【保全上の留意点】

草がまばらに生える汚染の無い砂浜・砂地を継続して維持すること。生息地への過度の立ち入りによる踏みつけや自動車などの乗り入れによる環境の大きな攪乱・汚染を防ぐ必要がある。

【引用文献】

- 石津明右・荒川鳳三, 1953. ハマスズ、マツムシモドキ伊良湖岬に産する. 虫譜, 3 (1): 7-8.
市川顕彦・村井貴史・本田恵里, 2000. 総説・日本のコオロギ. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 257-332.
長谷川道明, 1991. 豊橋市表浜におけるヤマトマダラバタとハマスズの採集例. 佳香蝶, 42 (164): 63.

ヤマトマダラバッタ *Epacromius japonicus* (Shiraki)

【選定理由】

本種は、海辺や大きな川の河川敷のまばらに草の生えるような砂浜・砂地に限って生息する。本種の記録されている県内のこうした環境の一部では、観光客などの増加による踏みつけやレジャー用自動車の乗り入れなどで状況は悪化しつつある。また、河川環境の変化によるものか砂の堆積が乏しくなり砂浜・砂地の面積が減少し、本種の生息に悪影響を及ぼしている地域もある。

【形態】

中型のバッタ。体長は♂27~32mm、♀35~41mm。♂・♀とも有翅。全体に灰白褐色で黒褐色の大小の斑点を密布する。頭・胸部背面は淡い赤褐色。前翅は淡い赤褐色で前縁部は斑模様となる。後翅は基方はごく淡い水色で黒褐色の翅脈以外には模様は無い。後脚腿節の外側は体色と同じ色模様だが内側はほぼ一様に灰白褐色で中央に大きな黒紋が二つある。

同所的に生息するイボバッタ、マダラバッタ、クルマバッタモドキなどは本種と酷似するので注意が必要。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島や知多半島の一部の海岸砂丘に見られるが、稲沢市(旧祖父江町)木曾川沿いのように河川敷の砂原にも生息する(岡田, 1990; 長谷川, 1991)。

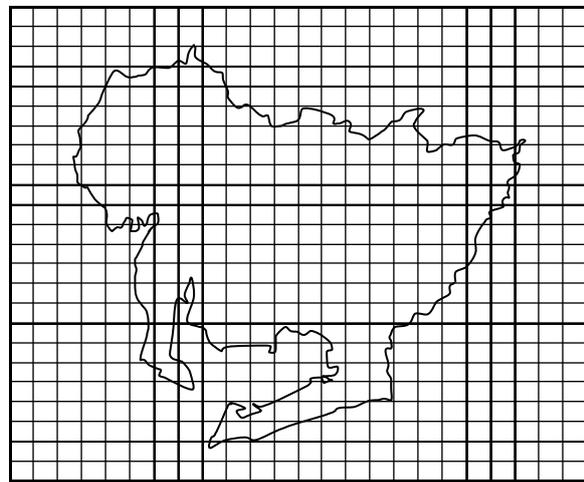
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

まばらに草の生える海岸砂浜もしくは河川敷砂地に生息。♂・♀とも発達した翅があり、数メートルの短距離であればよく飛ぶ。体色は生息地の環境に良く似た隠蔽色となっており、翅を畳んだまま静止しているときは見出しにくい。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

稲沢市(旧祖父江町)の生息地は、人による踏みつけや河川敷砂地への自動車の乗り入れなどで環境は悪化している。ここでは1980年に採集された標本を最後にその後の記録はでていない(岡田, 1990)。

常滑市の生息地は、防波堤の外側(海側)にある長さ300m、幅50m、ほどの小さな砂浜である。まばらに海浜植物の生える良好な環境である。しかし、一部が資材置場として使用され、現在はその跡地は土を被ったままで局地的に環境は悪化した。

豊橋市の生息地は、ウミガメ保護のために砂浜への自動車の乗入禁止があるなど、本種の生息にとっても好都合である。現状が維持されれば本種の存続に問題はない。2006年9月現在の現地調査では、常滑市、豊橋市の生息地は健在であった。

【保全上の留意点】

まばらに草の生えるきれいな砂浜・砂地を継続して維持すること。冠水などのため、ヘドロや土が被さった砂地はよくない。逆に、草が茂りすぎるとマダラバッタやクルマバッタモドキのほう優勢となってしまうので注意が必要。生息地への無差別かつ過度の立入りは控えること。

【特記事項】

本種の別名は「ヤマトバッタ」。最近では標記のように「ヤマトマダラバッタ」に統一された。

【引用文献】

長谷川道明, 1991. 豊橋市表浜におけるヤマトマダラバッタとハマズズの採集例. 佳香蝶, 42 (164): 63
岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目(1). 愛知県の昆虫, (上): 87-93. 愛知県.

イトアメンボ *Hydrometra albolineata* (Scott)

【選定理由】

かつては溜め池や河川に普通に見られたとされるが、1960年代以降急激に激減し、現在では全国的にも極めて稀な種となってしまった。人里近くに生息するため、人間活動の影響を受けやすい。

【形態】

イトアメンボ科の中では大型種で、体長は11～14mm。一般に♀の方が♂よりも大型である。体色は黒褐色で、♂の腹部第7節腹面には長毛を密生する。ヒメイトアメンボ *H. procera* Horváth や オキナワイトアメンボ *H. okinawana* Drake に一見似るが、明らかに大型で、触角第2節と第4節はほぼ等長である。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、名古屋市、犬山市などの記録があるが、多くは誤同定の可能性が高い。

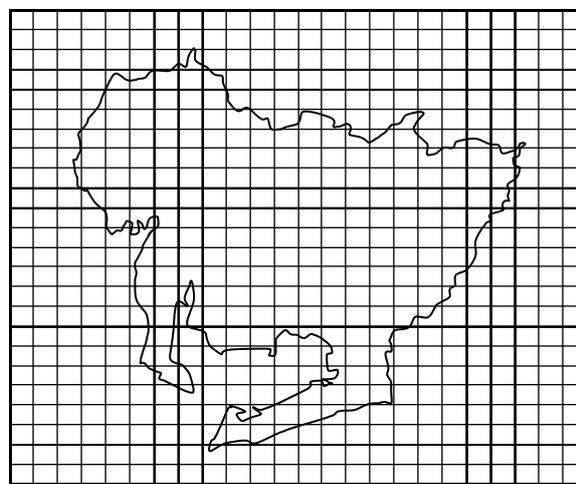
【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬、トカラ列島（中之島、宝島）、奄美大島。

【世界の分布】

中国、韓国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

他県の生息地における観察からは、まばらに草の生える休耕田で、開放的な水面環境を好むようである。溜め池にも生息するが、古くから環境があまり変化せず、良好な水環境が維持されている場所に限られる（林, 2001）。灯火に飛来することがある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

現在知られる確実な産地は見いだしていない。農薬による水質悪化や水田、溜め池の埋め立てなどが減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

休耕田や低湿地の保全であるが、宅地造成や乾田化のため難しい面がある。県内の分布状況もさらに詳しく調べる必要がある。

【特記事項】

ヒメイトアメンボのやや大型の♀個体を本種と誤認している場合が極めて多く、過去の記録に関しては標本の再確認が必要である（矢崎・石田, 2008）。

【引用文献】

林 正美, 2001. 最近のイトアメンボ採集記録. *Rostria*, (50): 51-53.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水半翅類. *佳香蝶*, 60 (234): 165-200.

【関連文献】

浅岡孝知, 1996. カメムシ目. 稲武町史－自然－資料編: 162-179. 稲武町.
浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
宮本正一, 1960. イトアメンボは普通種でなくなっている. *Pulex*, (25): 99.

ババアメンボ *Gerris babai* Miyamoto

【選定理由】

全国的に産地はかなり局所的で、本県では 3 箇所から確認されているにすぎず、生息基盤が脆弱である。抽水植物が繁茂する水質良好な平野部の止水環境に生息するが、そのような環境が激減している。

【形態】

小型のアメンボで、体長は 6~9mm。体色は黒色で、胸部側縁の青みが強く、前脚腿節は大部分黒色を呈する。♂の第 7 節腹面の後縁中央部は台形状に湾入する。通常は長翅型が多いが、短翅型や微翅型も出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、田原市、東浦町のみから記録されている。

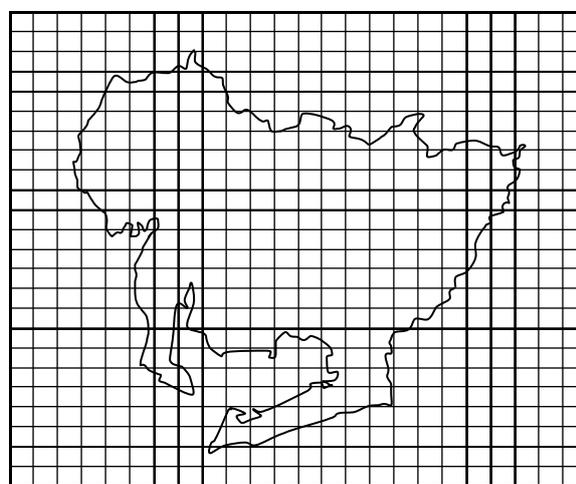
【国内の分布】

北海道、本州。

【世界の分布】

ロシア（極東、東シベリア）、中国、韓国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

生活排水の流入がない水質良好な低地の溜め池で、ガマやヨシなど抽水植物が繁茂する環境に生息する。生息地では開放水面と抽水植物帯の境界付近で確認されることが多い。しばしばエサキアメンボと共に見いだされる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

渥美半島や知多半島の沿岸部で、ガマなど抽水植物が繁茂する溜め池に生息している（矢崎・石田、2008）。農業による水質悪化や溜め池の埋め立てなどが減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

農業や生活排水が流入しないよう水質を維持管理し、抽水植物帯の保護に努める必要がある。観賞用にホテイアオイなどの水草を持ち込む場合があるが、繁殖力が強く水面を覆い尽くしてしまい、本種の活動域を消失させることになっている。このような外来水草の侵入も防ぐ必要がある。

【引用文献】

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

ホソハンミョウ *Cicindela gracilis* Pallas

【選定理由】

本種のおもな生息地は耕作地や河川敷などであるため人為的な影響を受けやすく現在の生息地も局地的なものとなり個体数が非常に少なくなった。

【形態】

体長 10～12mm の小型のハンミョウで後翅は退化し飛ぶことができない。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市周辺、庄内川河川敷。
桑畑や果樹園など地表部が露出する林床、河川敷の草間や時には畑などの耕作地に見出される。

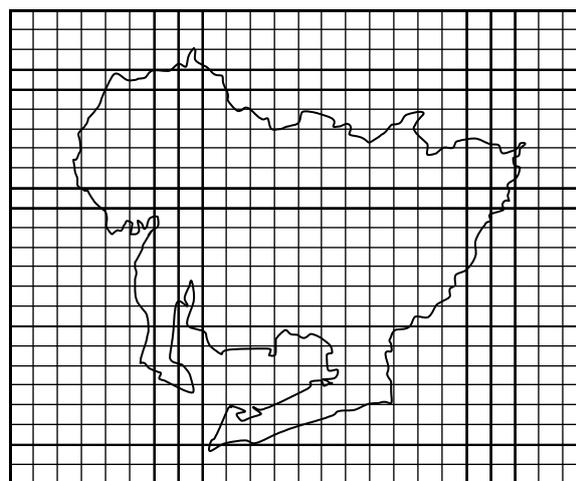
【国内の分布】

本州、四国、九州の主に低地。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国北東部、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本邦産ハンミョウとしては特殊な環境に生息する。多くのハンミョウ類は河川敷や海岸の砂浜、山地の道路上など日当たりの良い乾燥した場所に生息するが、本種は上記のような草地と地表が露出した部分が混在する場所を生息地とし、特に耕作地周辺などを好んで生息地とする。後翅が退化して飛べない代わりに敏速に走り回り小動物などを捕獲して食べる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

耕作地では農薬の散布、河川敷では河川改修や公園緑地化により生息地が破壊されている。現在では庄内川の河川敷、特に小規模な耕作地の周辺にわずかながら生息地が残されているに過ぎない。

【保全上の留意点】

現在の生息地である河川敷をむやみに改変しないこと。特に芝生を敷き詰めたさような単調な公園整備は河川敷の生態系を含め大きな障害となるため配慮が必要である。また本種の良い生息地となっている庄内川河川敷の耕作地における農薬の散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

セアカオサムシ *Hemicarabus tuberculatus* (Dejean et Boisduval)

【選定理由】

愛知県からは春日井市の庄内川ただ一ヶ所から記録されている。本種は広範な環境に生息するが山地の自然度の高い地域より河川敷や耕作地など人里の環境に多くの生息地を持っており、人為的影響を受けやすい。

【形態】

体長 16～22mm の小型のオサムシで前胸背板および上翅側縁は銅色の金属色を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県からは春日井市熊野町の庄内川河川敷が唯一の記録地として知られている。

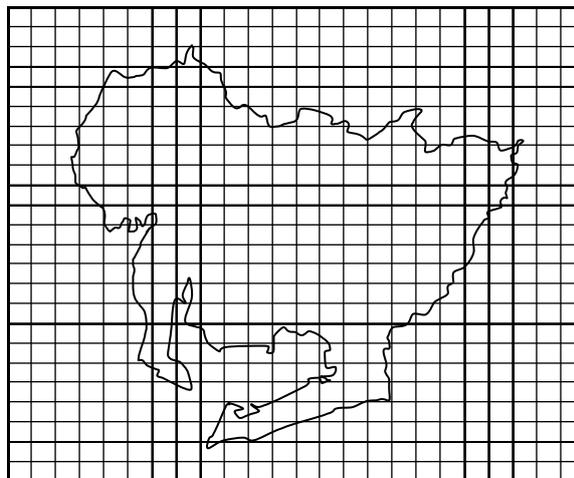
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種は山地から低地まで広い範囲に分布し、河川敷や耕作地周辺、疎林の明るい地表などに生息する。しかし分布は局所的である。

県内唯一の記録地であった庄内川河川敷の生息環境は、砂地近くのススキがまばらに見られる場所で、砂地を生息地とするオサムシモドキと共に得られている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

記録された 1979 年には個体数は少なくなかったが、直後に生息地はブルドーザーにより整地されてしまいその後の採集例はない。河川敷の護岸整備などにより、本種の主要な生息地であったと考えられる河川敷の環境が失われたことが大きな減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

河川敷の管理、開発には十分な事前調査と生物多様性への配慮が必要。とくに氾濫源などの湿った荒れ地を好む甲虫類は、河川整備に強く影響を受ける。

【関連文献】

河路掛吾, 1979. 庄内川に生息しているセアカオサムシ. 佳香蝶, 31 (119): 46.

オオヒョウタンゴミムシ *Scarites sulcatus* Olivier

【選定理由】

海岸や河川の下流域の砂浜を代表する大型の甲虫。分布地は局地的で護岸工事や河川改修などの人為的影響を受けやすく、近年では各生息地でも個体数の減少や生息地の消失が懸念されている。

【形態】

体長 28～38mm 以上と大型のゴミムシ。全身黒色で大顎は発達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島、三河湾、知多半島の各地の海岸、河川では矢作川や木曾川の下流域の河川敷、また津島市内の木曾川旧河道にあたる地域で記録がある。

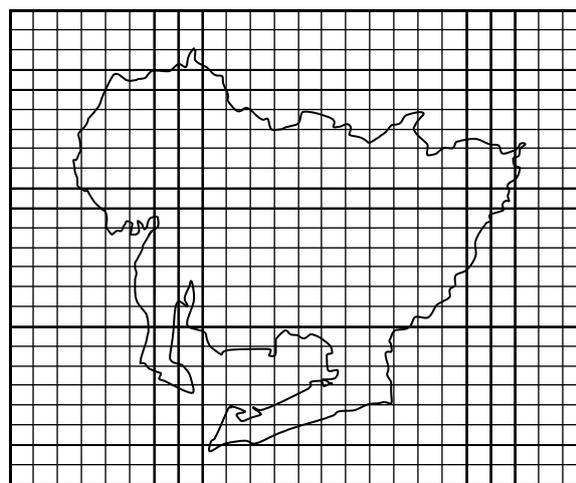
【国内の分布】

本州、九州、四国。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インド。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

河川や海岸の砂地および周辺の草地に生息する。成虫は砂地に深い坑道を掘り、主に夜間に活動する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

現在本種の生息できる砂浜や河川敷は徐々に狭められてきており、個体数も減少している。特に現在最も個体数の多い地域は稲沢市（旧祖父江町）の木曾川河川敷、常滑市の海岸の 2 箇所であるが前者は公園整備とともに生息地が駐車場や公園施設の拡大によって狭められ、後者は空港の開港や海岸の公園化に伴い、海岸の整備が進み良好な砂地が減少し、生息地が消失の危機にある。

【保全上の留意点】

海浜や河川敷に生息するオサムシ科の甲虫ははじめ多くの種は、一部の種を除き環境の悪化に敏感に反応し急速に絶滅する傾向が認められる。これは山地の森林に生息する種が連続する広範な生息地を背景に持っているのに対し、河川や海浜の生息地が線状であり簡単に孤立する危険性を持つことにあると思われる。これらの種や生態系の保全にはそれらの事柄を十分に理解し単にその地域のみを保全すれば良いというものではなく、それぞれの生息地を孤立させないような対策でなければならない。

【関連文献】

- 大平仁夫, 1975. オオヒョウタンゴミムシ岡崎市に分布する. 三河の昆虫, 10: 39.
大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 岡崎市史 自然: 1024-1096.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 314. 愛知県.

ハマベゴミムシ *Pogonus japonicus* Putzeys

【選定理由】

潮間帯に生息する珍しいゴミムシ。県内で生息が確認されたのはごく最近であり、減少傾向などは不明であるが、自然海岸の減少と海水の汚れから生息基盤が脅かされており、絶滅の危険が増大していると考えられる。

【形態】

体長 6.5mm 内外。艶のある黒色で、上翅は赤褐色を帯びる。脚は褐色。頭部、胸部は大きく、複眼の内側には明らかな縦隆があり、前頭溝は平行する。前胸の基縁は前縁より幅広。上翅は両側がほぼ平行で、基縁は縁どられ、条線は明らか。

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市鍋田干拓地ならびに未発表ながら豊橋市豊川河口部でも採集されている。

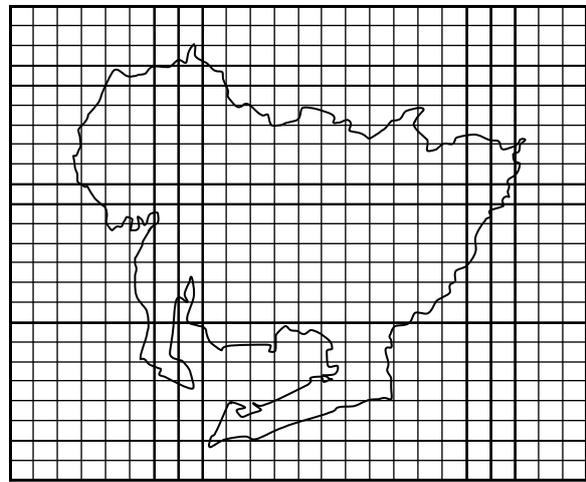
【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本の特産種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

県内での生息地は、いずれも砂浜を伴う潮間帯。初夏に潮間帯に打ち上げられた藻類の下などで発見される他、灯火に飛来する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での生息が確認されて以降記録は無いが、当時から生息環境に大きな変化はない。潮間帯の芦原に生息する種なので、自然海岸の減少ならびに潮間帯の汚染によって簡単に生息環境が損なわれる危険性が高い。

【保全上の留意点】

現在残る自然海岸、ないし自然環境が良好な海岸、潮間帯の保全が最低限必要であるが、本種の生息地となる河口部の環境維持には、上流部も含めた河川の浄化が必要であり、保全には困難を伴う。

【関連文献】

穂積俊文, 1997. 愛知県未記録甲虫数種. 佳香蝶, 49 (192): 71.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

ヒトツメアオゴミムシ *Chlaenius deliciolus* Bates

【選定理由】

全国的にも個体数の少ない種だが 1970 年代までは尾張地方の丘陵地で採集されていたが、1980 年代に入ってからほとんど見られなくなった。

【形態】

体長 10～12mm の中型のゴミムシ。頭部は黒色で緑色の金属光沢を帯び、前胸は橙黄色、上翅周縁部は橙黄色に縁取られ、会合部後半に同色の斑紋を持つ美しいゴミムシである。

【分布の概要】

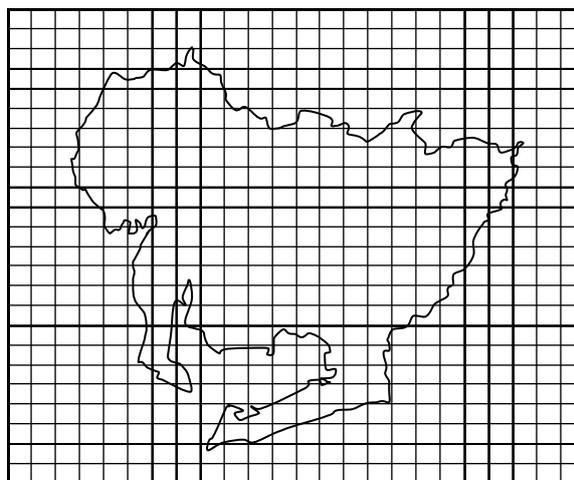
【県内の分布】

瀬戸市定光寺（佐藤ほか, 1990）、春日井市各地（佐藤ほか, 1990）、小牧市小牧山（佐藤ほか, 1990）などに記録があり、尾張丘陵地帯には局地的ながらも広く分布していたものと思われる。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種は丘陵地～低山帯の森林内の開けた林床、裸地に生息する。夜間活発に活動し、小動物などを捕食する。生息地は水辺から離れた林床であるが、十分な湿度を保っている環境を好む。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

定光寺以外の記録はいずれも 1950 年代以前のもので個体数も多くはない。定光寺の生息地も 1970 年代後半に周囲の森林が伐採され、生息地の乾燥化にともない姿を消し、1980 年代以降の記録はない。

【保全上の留意点】

本種だけでなく地表性のゴミムシ類の減少は近年著しく、生息地の破壊のみならず、餌となる微小動物などを含む生息地全体の生態系の保全に留意が必要と思われる。

【引用文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

クビナガキベリアオゴミムシ *Chlaenius prostenus* Bates

【選定理由】

低地の湿地に生息する全国的にも稀少なゴミムシである。本種は特にため池などの止水環境に限定して分布する傾向が強い。近年では溜池をはじめ低地の止水環境は悪化の一途をたどっており、本種の生息状況は年々危機を増している。

【形態】

中型のゴミムシで一見同じような環境に生息するヒメキベリアオゴミムシに似るが、本種は前胸の中が広く腹板が褐色であることなどから区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張旭市の2箇所の溜池(佐藤ほか, 1990)から記録されている。

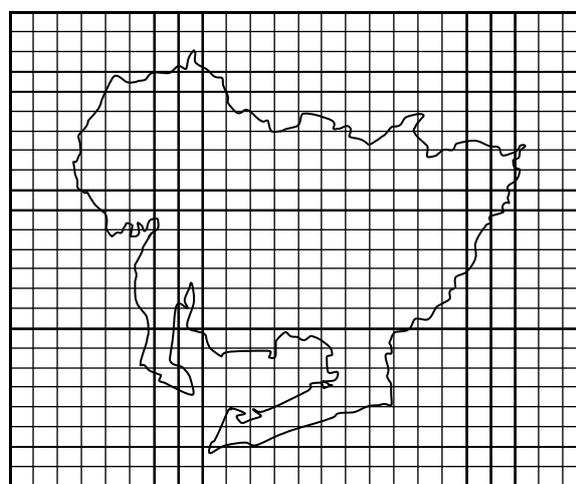
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

低地の湿地、特にため池等の水辺および周辺の湿潤な草むらに生息する。近縁のヒメキベリアオゴミムシが水辺一般の広範な環境に生息しているのに対し、本種は止水域の周辺に限られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

灌漑用の水路の発達とともに溜池の利用価値が低下し、埋め立てによる生息地の消滅や雑排水の流入により水質の悪化。また公園化による水辺環境の人工的な改変など生息環境は悪化している。本種は尾張旭市内の濁池、大道平池の2箇所から記録されているが、いずれの地でも近年の調査では生息が確認できていない。

【保全上の留意点】

自然度の高い溜池の保全が急務。雑排水の流入をできる限り制限し、あわせて周辺の草地や樹林の保全が必要である。

【引用文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aubé

【選定理由】

かつて平野部から山地にかけて普通に見られた種であるが、生息地となる各種水域が開発等によって急速に失われ、県内ではごく限られた地域に残存しているに過ぎない。

【形態】

体長 20～25mm。体は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。体下面は暗赤褐色で、腹部第3～4節の両端に黄褐小紋を具える。上翅には3点刻列があり、翅端近くに小さな黄褐紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

かつては平野部の水域に多く見られたが、現在では丘陵に残された僅かな池にのみ生息。

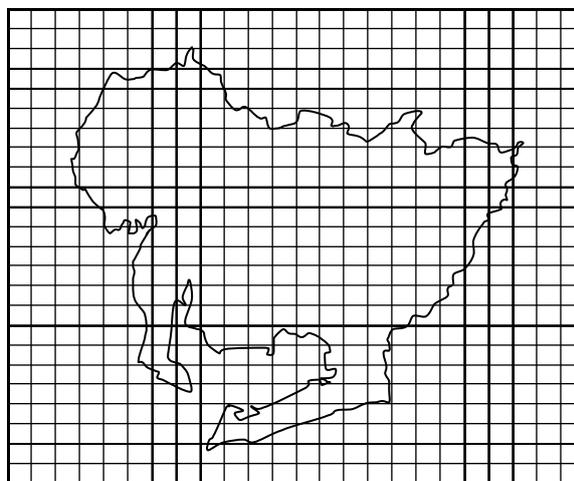
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

水生植物の生えた池沼、水田などかなり広い水域に適応している。幼虫は5～8月に見られ、成虫は8～9月に出現し、成虫で越冬する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

平野部での自然池の亡失、圃場整備など水田の構造改善によって非常に少なくなった。

【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。また、オオクチバスなど侵略的外来種は本種など止水性の昆虫類にとって大きな脅威となるので、駆除を急ぐ必要がある。

【関連文献】

北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 153. 文一総合出版.

オオツノハネカクシ *Bledius salsus* Miyatake

【選定理由】

かつては塩田にみられた種であったが、近年の製塩法の変化に伴う塩田の減少により、本種の生息環境も減少した。

【形態】

体長 6～7mm。体は黒褐色で、前胸背、上翅側端部、尾端節、肢は褐色。♂の前頭部に 1 対、前胸背板の前縁中央に 1 本の角を具え、♀は頭部前方に 1 対の突起を具える。

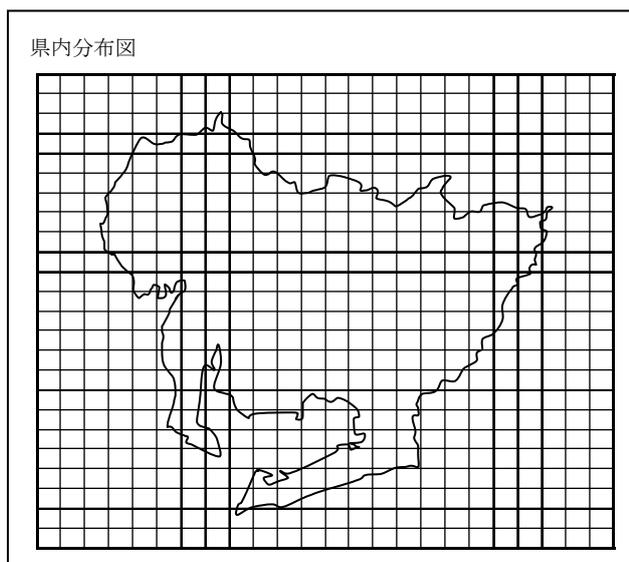
【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市（旧弥富町）鍋田（穂積, 1990）、蒲郡市塩津。

【国内の分布】

瀬戸内海沿岸地帯、東京都多摩丘陵、東京都大田区。



【生息地の環境 / 生態的特性】

昭和 35 年頃から、瀬戸内の流下式塩田では、流下盤として使われた海底の粘土に孔をあげ破壊してしまう昆虫が現れた。研究の後、新種として 1963 年に宮武が上記種に命名記載をし、その後生態と防御が研究された。食性については粘土、珪藻と 2 説がある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

製塩法も画期的に変わり塩田も見られなくなった。現在では干拓事業の行われている地区にわずかに生息しているに過ぎない。

【保全上の留意点】

鍋田干拓周辺など、現在残されている生息地周辺では、生息環境の維持、保全が必要であると思われる。

【引用文献】

穂積俊文, 1990. オオツノハネカクシの新産地. 月刊むし, (235). 28.

【関連文献】

渡辺泰明, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 514pp. 保育社. 大阪.

ヤマトモンシデムシ *Nicrophorus japonicus* Harold

【選定理由】

平野部に生息する代表的な大型シデムシとして知られていた種であるが、近年生息に関する情報が著しく減少している。

【形態】

体長 14～20mm。黒色で、各上翅に 2 本の鮮やかな赤色の帯状紋がある。帯状紋は会合腺に達することはなく、中に黒点を含まない。後脛節は強く湾曲する。

【分布の概要】

【県内の分布】

安城市、名古屋市、小牧市、犬山市、津島市、愛西市などの平野部から記録されている。

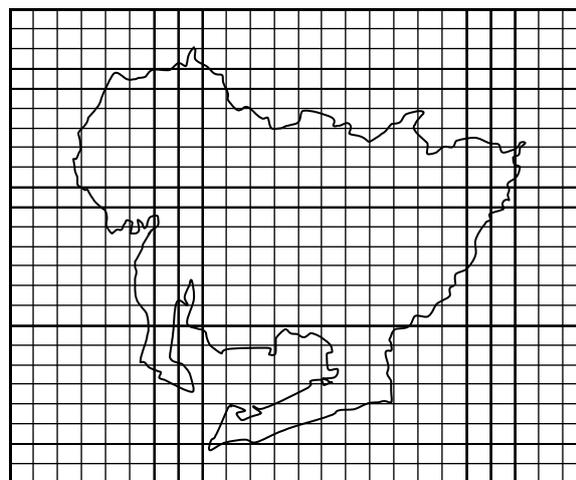
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

主に平野部を中心に分布し、小動物の死体に集まる。親虫は幼虫の生育が完了するまで付き添い保育を行うなど高度な亜社会性生活を営む。河川敷など、動物の死体が流れ着きやすいところに生息しているものと考えられる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

美和町、鍋田干拓地では 1990 年以降の生息確認があるが、その後の記録が無いため現在の生息状況は不明である。かつて採集記録がある名古屋市、小牧市など尾張地方都市部でも近年の記録報告は聞かない。

減少の要因としては、都市化の進行とともに平野部に本種の生息に適した環境が減少したこと、ならびに餌となる小動物が減少したことがあげられる。また、衛生環境が整い、小動物の死体等が放置されなくなったことも要因となっているかも知れない。

【保全上の留意点】

減少の背景には、野生小動物の減少や衛生環境の改善による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。県内での詳細な分布状況と生息環境の把握を行う必要がある。鍋田干拓周辺など、現在残されている生息地周辺では、生息環境の維持、保全が必要であると思われる。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis

【選定理由】

全国的にも個体数の少ない大型のコガネムシで、生息には、内部にウロをもつミズナラなどの大木が存在する自然度の高い森林が欠かせない。県内では、そのような自然林は限られてきており、さらにその環境の劣悪化によって個体数の減少が懸念されている。

【形態】

体長 26.3～36.1mm。にぶい光沢のある黒褐色で、青銅ないし紫銅色の光沢を帯びることもある。前胸背には中央に一对の縦隆条があり、オスでは明瞭に発達する。上翅背面は平坦。独特の強いジャコウ臭がある。

【分布の概要】

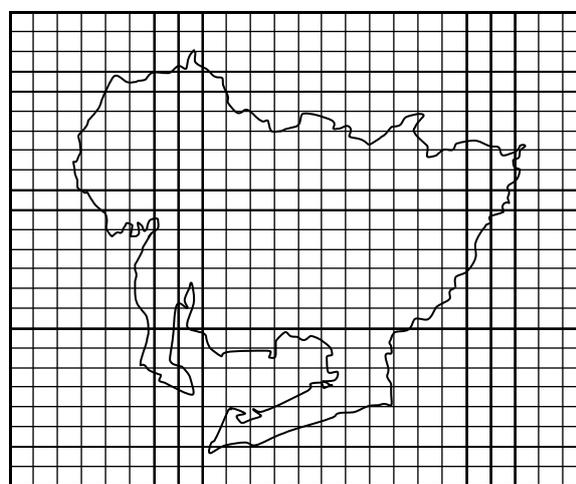
【県内の分布】

豊根村、設楽町、新城市から記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、屋久島。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

ブナ林を中心にした自然度の高い森林に生息する。幼虫は、ミズナラ、カエデ類、スギ等の大木にできた樹洞内に貯まったフレーク状の腐植土中に生息する。成虫は7月～8月に出現する。日中樹冠部を飛ぶが、樹洞内に潜んでいることが多い。また、樹洞入り口で放屁姿勢をとっている行動が観察される。恐らく独特のジャコウ臭を放っているものと思われる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内でこれまでに確認された個体はのべ10個体にも満たず、個体密度はかなり低いものと推測される。本種の発生木となる必要条件を満たす樹木は、森林中に数が限られており、また更新には長い年月が必要となると考えられる。さらにそのような発生木となる条件が揃う確立も低いものと考えられる。そのため本種は、同一の発生木を長い年月にわたって利用することが考えられ、一本の発生木の消失は、本種の生息に大きなダメージを与える可能性がある。

【保全上の留意点】

現在の生息地である森林の保全、並びに発生木となる可能性のある大径木の保護が望まれる。

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群 1: 145. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 126. コガネムシ研究会.

クロサワドロムシ *Neorihelmis kurosawai* Nomura

【選定理由】

河川の中流、上流域に生息する種であるが、県内ではもともと生息地が少なかった上、小河川の水質汚濁が進んだことによって、非常に個体数が少なくなってしまったものと推測される。

【形態】

体長 3.8～4.1mm。体は長卵形で黒褐色。前胸背板はよく膨隆するが、凹みを欠く。上翅には 10 点刻条があり、間室は平たい。前胸腹板の隆条は前縁に達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川上流域、瀬戸市赤津川で確認されている。

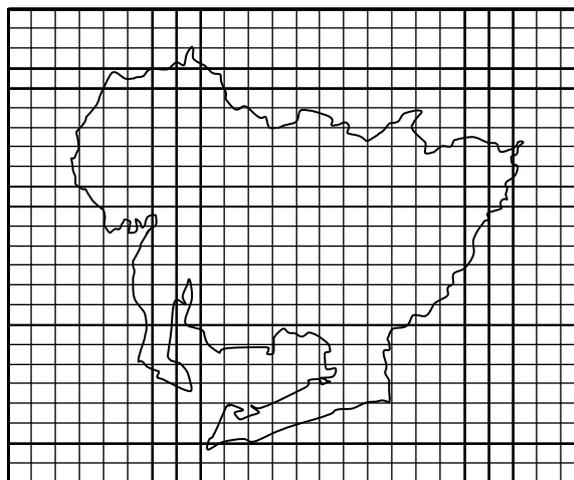
【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

日本の特産種。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

河川上流域の浅瀬または植物がからまった岸辺の水中に生息しているが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

上記の 2 ヶ所以外に報告がない。県内には、本種の生息に適した環境が限られている。減少の要因としては、ダムや砂防堤の設置による生息環境の消失、周辺地域、支流からの汚水流入などが推測される。

【保全上の留意点】

河川の浄化と周辺地域からの土砂の流入防止が必要。

【関連文献】

佐藤正孝・成瀬義一郎, 1963. 矢作川流域の水生甲虫類. 矢作川の自然: 163-172. 名古屋女子大学.
吉良博之ほか, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.

クロマダラタマムシ *Nipponobuprestis querceti* (Saunders)

【選定理由】

エノキなどの大木に見られるが、個体数が少ない。生息地は平野部に偏る傾向があるが、平野部に残存するこれらの大木はもともと少なく、かつ都市化による乾燥化などにより生息環境があきらかに悪化、縮小してきている。

【形態】

体長 17～28mm。黒色で、赤銅あるいは青緑色の金属色を帯び、上翅には多数の黄白色の小円紋がある。近似種にアオマダラタマムシがあるが、この種とは、体色の他、上翅の縦隆脈が太く弱いこと、上翅に各 2 個の円形の陥凹紋を欠くことなどで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

平野部を中心に分布し、稲沢市（穂積，1965）、名古屋市（長谷川，2002）、岡崎市（大平，1985）、豊橋市（佐藤ほか，1990）などから記録がある。

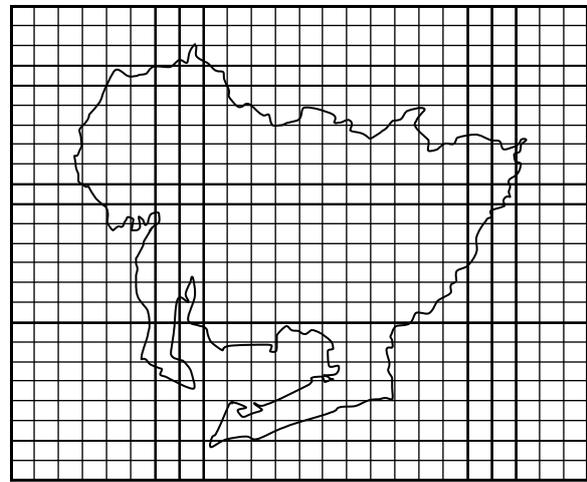
【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州。

【世界の分布】

中国中部。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

県内では平野部および丘陵地で、寄主植物となるエノキ等の大木が存在する林に生息する。成虫は、5～7月 月に出現し大木の枯れ死部や樹冠部に見られ、幼虫は県内の観察例ではウロを伴う大木の枯死部に見つかる例が多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋城産の古い標本が残されていることから、かつては、名古屋市内にも生息していたが、近年の尾張地方での記録は聞かれない。三河地方では大木を伴う寺社、公園等の緑地に生息地が残されている。もともと個体数の多い種ではない。減少の原因としては、発生木となるエノキ大木の減少。分布の中心が平野部であるため、都市化の影響を強く受けたものと推測される。

【保全上の留意点】

生息地での発生木ならびに周辺環境の保全。特に本種の生息地となっている公園などでは、整備や管理事業が本種の生息環境の悪化に繋がらないよう十分考慮すべきである。

【引用文献】

- 穂積俊文，1965. 船越俊平氏の標本箱より. ナビニュース, 55: 530.
大平仁夫，1985. 岡崎市の昆虫類. 岡崎市史, 自然: 1024-1096.
佐藤正孝ほか，1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
長谷川道明，2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

【関連文献】

- 蟹江 昇・戸田尚希，2008. 愛知県のタマムシ. 佳香蝶, 60 (234): 207-230.

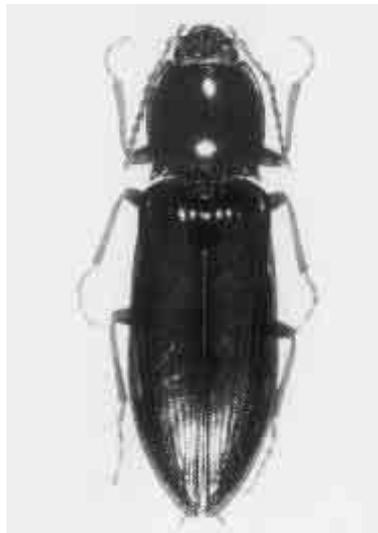
ツヤヒラタコメツキ *Aganohypogonus mirabilis* (Miwa)

【選定理由】

本種の実産地は岐阜県（岐阜市金華山）である。その後、愛知県から和歌山県に至る雑木林帯に点々と記録されてきたが、どこも偶然に見出されていてまれである。また、本種は日本固有種で1属1種からなっており、学術的にもきわめて重要な存在である。

【形態】

雄の体長は11～13mm内外で、雌は一般に大形で体長16mmに達するのがいる。体は黒色（まれに暗褐色）、表面は無毛状で光沢を有し、頭部と小盾板には灰黄色毛を生じる。触角は短く、前胸背板の側縁は明瞭な縁取りを有し、上翅の側縁は偏平状に外方に進展する。

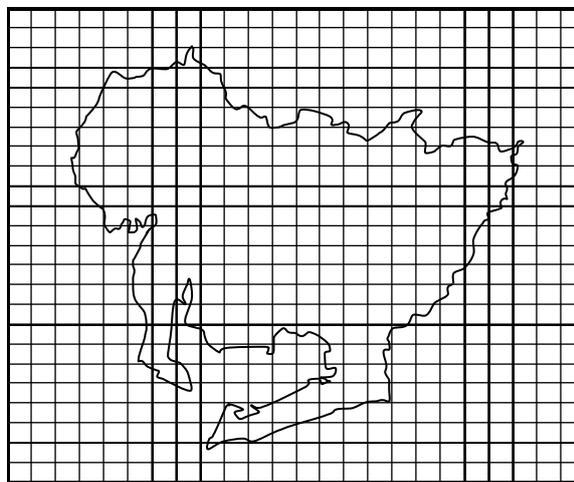


♂
瀬戸市定光寺, 1984年5月10日, 蟹江 昇 採集

【分布の概要】

原記載以降に、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、和歌山県から記録されているが、愛知県では岡崎市、豊田市、豊明市、瀬戸市から記録があるのみで、いずれも個体数が少なく、現在では生息地が土地整備などで失われているところもある。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫は3月下旬から5月上旬に見出されている。発生地は山林から都市周辺の雑木林まで一定していないが、岡崎市では市街地近くの雑木林で発生していた。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本種は主として人里の周辺の雑木林で見出されているが、そこは土地整備などの影響を受け易く、絶滅の危険が大きい。

【保全上の留意点】

本種は雑木林性の種のようなのであるが、個体数が少なく、幼虫の生息場所など生態も不明なため、真の生息環境の把握ができていない。現在ではギフチョウが発生するような里山の雑木林をできるだけ広く保全して行くことが必要と思われる。

【引用文献】

大平仁夫・平松広吉, 1998. 和歌山県産コメツキムシ類の記録(8). 南紀生物, 40 (2): 162-164.
大平仁夫, 1995. 三河地方から採集されるコメツキムシについて(13). 佳香蝶, 47 (184): 57-59.

シタラミヤマヒサゴメツキ *Homotechnes motsulskyi suzukii* Ôhira

【選定理由】

本州と四国の高山帯に分布し、後翅が短小化して飛翔ができないため、産地ごとに生殖隔離で生じたと思われる固有の形態上の変異が見られ、現在 50 余の亜種に分類されている。高山帯が存在しない愛知県内からは未知であったが、2005 年 6 月に設楽町岩小谷山（標高 799m）の谷で見出された雌個体に基づいて、上記の亜種名を付して新亜種として記載された（Ôhira, 2006）。愛知県固有の亜種である。



♀
設楽町岩小谷山, 2005 年 6 月 4 日, 鈴木栄二 採集

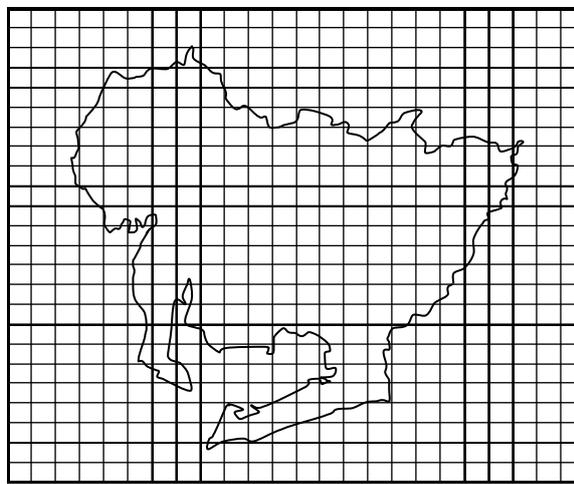
【形態】

体長は 9~10mm 内外。体は黒色~黒褐色で光沢を有し、上翅の側縁部と体下面などは暗褐色、触角は暗褐色（基部 3 節は黄褐色）で肢は黄褐色である。原記載は雌個体でなされたが、その後雄個体も見出された（大平・鈴木, 2007）。図は体長 9mm の雄個体。

【分布の概要】

現在はこの山が唯一の産地である。周辺にはこの岩小谷山に類似した山が存在しているので、今後はその周辺の分布の可能性についても調査することが必要である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

成虫も幼虫も谷沿いの岩石の隙間や堆積物の下側などに生息しており、幼虫は活発に活動して捕食性を有する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本亜種がこの山に隔離されて分布するに至った経緯は、過去のこの地域の地質地形の変異の歴史があると思われるので、その解明が必要である。

【保全上の留意点】

本種はこの山に隔離されて分布しており、個体数や生息範囲も限定されているので、現在の生息環境を保全し、採集圧なども加えないことが必要である。

【引用文献】

Ôhira, H., 2006. New or Little-known Elateridae (Coleoptera) from Japan, XLVIII. Elytra, Tokyo, 34 (1): 153-155.
大平仁夫・鈴木栄二, 2007. 愛知県岩小谷山産のシタラミヤマヒサゴメツキについて. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (36): 1-4.

カツラネクイハムシ *Donacia katurai* (Kimoto)

【選定理由】

本県が分布の東限となっており、学術的にも重要な種である。本種は、都市化による環境悪化が著しい丘陵地の湿地・湿原を生息場所とし、現在確認されているのは3ヶ所ではない。

【形態】

体長5～8mm。通常金銅色であるが希に青色、赤色のものが出現する。各脚は短く、体形ははやや筒状。腹部第一節は、以降の節の和より長い。前胸背はほとんど雛がなく、粗い点刻におおわれる。ツヤネクイハムシに似るが、本種は肢全体が金属色をしており判別できる。

【分布の概要】

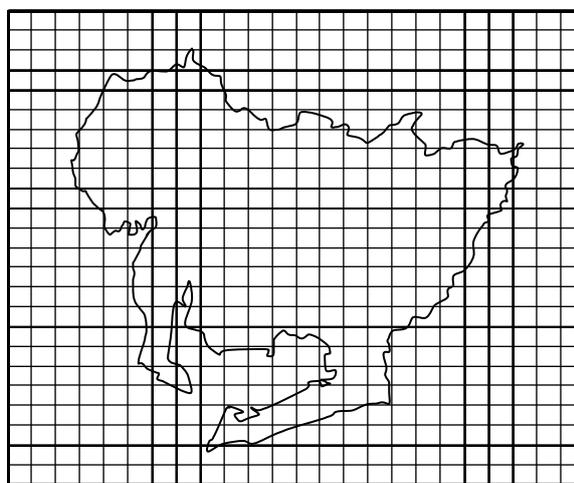
【県内の分布】

豊橋市葦毛湿原（野尻湖昆虫グループ、1985）、豊田市昭和の森（長谷川・吉富、1998）、名古屋市天白区平針（長谷川・吉富、1998）。

【国内の分布】

本州。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地～山地の明るい湿原に生息する。成虫は5～6月出現し、ヤチカワズスゲ、タチスゲやキヌガサスゲなどの葉、あるいは花を食べる。幼虫は土中で、これらのスゲ類の根を食べることが知られているが、県内での詳しいことは分かっていない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息地のうち、豊橋市葦毛湿原、豊田市昭和の森は、湿原全体の保護施策がとられているが、この数年葦毛湿原では、未確認。本種は丘陵地の明るい湿地に生息するが、限られ場所で僅かに温存しているにすぎない。生息場所の湿原・湿地の乾燥化による面積の減少や環境の悪化は、生存を脅かす恐れがある。

【保全上の留意点】

本種が生息する湿地・湿原は、ヒメタイコウチ、ヒメヒカゲ、アカジマアシブトウンカ、ハッチョウトンボなど、当地方を代表する希少昆虫を伴うことが多い特殊な環境である。周辺部を含めた現状の環境保全に留意すべきである。

【特記事項】

豊橋市は現在知られる本種の東限産地である。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之, 1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48.
野尻湖昆虫グループ, 1985. 日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ.

【関連文献】

林 成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

ハマベゾウムシ *Aphela gotoi* (Chûjô et Voss)

【選定理由】

砂浜が発達する自然海岸に限って生息するゾウムシで、愛知県知多半島産および三重県津市産の標本を基に記載された種であるが、いずれもすでに絶滅している。1992年に再発見された現在の生息地は、東海地方で唯一の生息地である。また全国的にみても本種の生息地は僅かで、県内に残る生息地は、種全体の保全からも重要な地域に位置づけられる。

【形態】

体長 3.8～5.2mm。赤褐色で脚は頑強で短く、ずんぐりした体型をした小型のゾウムシ。前けい節端の外角は細長く突出し、後けい節端には三日月型の外室がある。

【分布の概要】

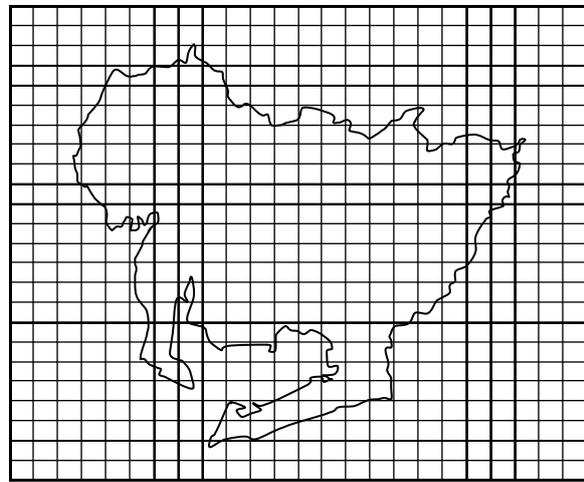
【県内の分布】

南知多町（絶滅）、豊橋市。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

砂浜の発達した海岸に生息し、海岸に打ち上げられたアマモを食べる。成虫は、ほぼ一年中みられるが、5月頃に最も多く、打ち上げられたアマモの下、あるいは砂中に埋まったアマモから見つかる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1956年に南知多町内海海岸で発見されたのが県内での最初の記録で、この標本が副基準標本に指定されている。しかしながら、内海では生息情報が長く途絶えており、悪化した生息地の様子からも絶滅したと考えられる。もうひとつの生息地である豊橋市の表浜海岸では、現在も確実に生息しており、生息環境も外見上は比較的良好に保たれているが、個体数の減少傾向が指摘されている。さらに、表浜海岸では汚水の垂れ流しによる海水の汚染が市民団体によって指摘されたこともある。本種の減少の原因としては、自然海岸の減少ならびに海水の汚染によるアマモの減少が大きな要因となっている。

【保全上の留意点】

現在の生息地である豊橋市の表浜海岸は、県内に残された数少ない自然海岸で、これまでの調査から、高い生物多様性を維持する極めて重要な地域である。現在残る自然海岸の保全はもちろんのこと、現在の生物多様性を維持するには背後の山林の保全も必要である。さらに海水を汚さないために、周辺水域へ汚水が流入することのないよう、十分な配慮が必要である。なお、豊橋市表浜での個体群を支えているのは、浜名湖から漂着するアマモであり、浜名湖の環境保全も本種の保全には重要である。

【特記事項】

豊橋市の表浜海岸は、日本昆虫学会自然保護委員会によって、「昆虫類の多様性保護のための日本の重要な地域」に選定されている。

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
長谷川道明・蟹江 昇, 1992. 豊橋市表浜海岸の海浜性甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (8): 41-48.

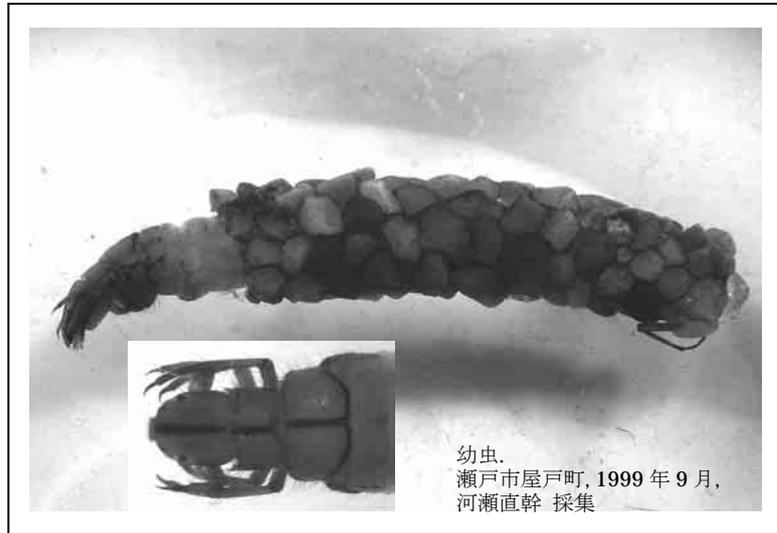
ヒトスジキソトビケラ *Psilotreta japonica* Banks

【選定理由】

生息地として平地～低山地の清冽な細流を好むため、人為的な影響を受けやすい。近年の記録はほとんど無く、希少な種である。

【形態】

成虫の前翅長は 10～11mm。
前翅はやや茶色を帯びた黒色。
終齢幼虫の体長は約 14mm、頭部および前・中胸の地色は黄色で、正中線上に 1 本の縦條紋が特徴的である。幼虫の巢は荒い砂粒からなり、円筒形で側面から見ると緩やかにカーブする。



【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市屋戸町および長久手町香流川で確認されている。

【国内の分布】

本州中部（愛知、岐阜、三重）および近畿地方（滋賀、京都、奈良）で確認されている。

【世界の分布】

日本にのみ分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

湧水が流入し、水温や水位が安定した山裾や扇状地の細流に生息する。同属で普通種のフタスジキソトビケラ (*P. kisoensis*) が山地溪流に生息するのに対して、ヒトスジキソトビケラは低地に見られる。生態的知見は乏しいが、成虫は 5～6 月に羽化し、年 1 化あるいは 2 年以上必要と推定されている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

最近の瀬戸市屋戸町における再調査では見つかっていない。また、長久手町香流川は環境の悪化から生息は困難になっていると思われる。低地の河川は開発や護岸の整備などで環境が改変されやすく、生息環境が脅かされている。

【保全上の留意点】

低地～平地の河川は水質汚濁や環境改変されやすく、低・平地河川を好む生物は特にその生息が危惧される。ヒトスジキソトビケラは湧水が流入する夏でも高水温にならない清冽な細流を好むので、周辺環境を含めた保全が必要である。

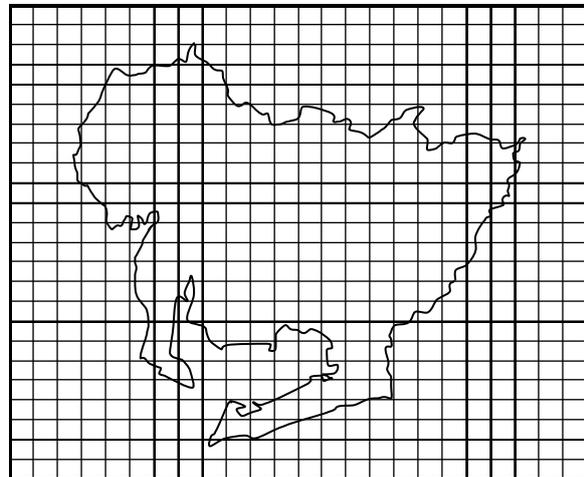
【特記事項】

1906 年に岐阜県から記載された種であるが、その後の記録は多くなく、特に最近の生息地に関する報告はほとんどない。京都府の RDB において、絶滅危惧種に指定されている。

【関連文献】

Parker C. R., Wiggins G. B., 1987. Revision of the caddisfly genus *Psilotreta* (Trichoptera: Odontoceridae). Royal Ontario Museum Life Sciences Contributions 144, pp.55.
高崎保郎, 2002. 香流川(愛知県長久手町)の底生昆虫 1979～2001. 佳香蝶, 54 (210): 21-28.

県内分布図



ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県では、尾張地方からは未知、三河でも局地的に生息地が知られるのみ。かつて生息していた豊田市(旧旭町)では1997から3年間の調査では発見されず、矢作川下流堤防でも2007年には発見できなかった。北設楽郡や豊橋市近傍からも最近の報告は乏しく、全体的に減少ないし消滅の傾向が著しい。全国的にも減少が報じられている。

【形態】

前翅長14~18mmの小型のセセリチョウ。♂♀ともに翅表は黒褐色で、斑紋はない。後翅裏面中央には、第1化(春型)の基部から外縁に向かい明瞭な白帯が1本あり、本種の特徴となっているが、第2化や第3化(夏型)ではこれが後翅の地色に近く、また細く、目立たない。♀は、腹部が太く、前翅の先端がやや尖る点で♂区別できる。斑紋の特異性から、本種と紛らわしいチョウはいない。

【分布の概要】

東海地方では、本種は河川の堤防草地と山間の明るい林間草地に限局的に発生している(高橋, 1964)。

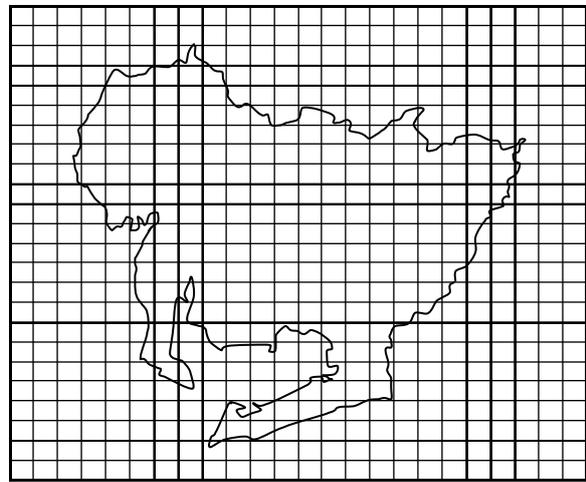
尾張地方では記録がない。岐阜県瑞浪市付近の土岐川堤防には生息が知られるが、その下流の庄内川の堤防からは知られない。

三河地方では、矢作川の下流の安城市、岡崎市などに生息していたが(高橋ほか, 1992)、2007年の調査では発見できなかった。豊橋市(牛川町、下条町、下地町、佐藤町、西岩田町)、豊川市(旧音羽町)、北設楽郡豊根村、設楽町(旧津具村)、新城市(旧作手村)、豊田市(旧旭町、旧稲武町)、などに少数の記録がある。

日本では、北海道、本州、四国、九州に分布するが、産地は局地的である。鹿児島県の鹿児島市、錦江町が南限となる。離島からは知られていない。

国外では、シベリア西部、アムール、中国西北部、朝鮮半島などに分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

草地が生息地となる。このような発生地は、ススキ、チガヤなどが自生する河川の堤防、鉄道線路周辺、山地草原などの明るい草原であるが、クズなどが繁茂すると生息しなくなる。海岸に近い草地にも発生地がある。

愛知県の平野部(矢作川下流地域など)では、5月上旬、7月上旬、8月下旬が最盛期となり、年3回発生する。豊田市太田町(旧旭町太田)(標高450m)で7月20日に採集した個体は第2化であったのに対し、同市大野瀬町(旧稲武町大野瀬)三国山(標高1,030m)で7月4日に採集した個体は第1化であった。前者では年2化、後者など高標高地では年1回発生にとどまるものと思われる。

成虫は、明るい草地を緩やかに飛び、すぐ草に止まる習性がある。曇天になると飛ばなくなる。ヒメジョオンなどの花でよく吸蜜する。ススキなどのイネ科植物に産卵し、孵化した幼虫はこの葉を食べ、幼虫で越冬、翌春蛹化、羽化する。第3化の世代に関する幼虫・蛹などについては調査が乏しい。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

矢作川下流の堤防草地の生息地には、かつてシルビアシジミも生息していた。現在は運動場、駐車場が作られ、また放置されてクズが繁茂し、ヤナギなどが成長し、本種に適した明るい開放的な草地が著しく減少した。豊田市(旧旭町)では道路がほとんど舗装され、カシワ林が切り開かれ、植林が繁茂した。また、耕地には農薬散布が行われており、これらが本種の減少の要因になったものと思われる。

【保全上の留意点】

明るい開放的な草地の保全が第一である。堤防の草地などは適当な管理が必要で、放置しておくとも草木が繁茂し過ぎて本種の生息地は消滅する。堤防の改修、道路の舗装、農薬散布は必要最低限とする。

【特記事項】

国内外で地理的変異はない。山梨県産には、裏面が暗化する型が知られるが、愛知県ではこのような個体は知られていない。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1964. 名古屋地方のギンイチモンジセセリ. 佳香蝶, 16 (58): 47-52.
高橋 昭・高橋 賢・高橋 理, 1992. 愛知県沖積平野部矢作川河川敷の蝶. 佳香蝶, 44 (169): 1-3.

コキマダラセセリ *Ochlodes venatus* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県では、1951年に北設楽郡茶臼山で始めて記録されて以来、豊根村と旧稲武町（現豊田市大野瀬町）、豊田市滝脇町からの記録しかない。しかし、岐阜県東濃地方などでは、近年激減が伝えられており、同じ生息圏の現象と考えられるため、本県でも絶滅危惧種に判定された。

【形態】

前翅長 16～18mm の中型のセセリチョウ。♀はやや大型。色彩や斑紋は♂と♀で大きく異なる。♂の前翅の色は橙色で、中室下縁に黒い性標が目立つ。前翅の外縁、後翅の周辺は黒褐色の縁取りが強いものから弱みものまで変異が大きい。♀の表面は全体に暗褐色、垂外縁の橙黄色の斑紋が弧状に並ぶ。

同属のヒメキマダラセセリに似るが、本種の方が、大きく、裏面の翅脈が細く不明瞭であることから区別は容易である。また、別属のアカセセリ（愛知県からは未記録、コキマダラセセリに比し、発生期がやや遅い）に類似するので注意が必要である。アカセセリは、♂の性標の中心に銀白色の鱗粉があり、♀では前翅表面第2室の基部に斑紋がない。

【分布の概要】

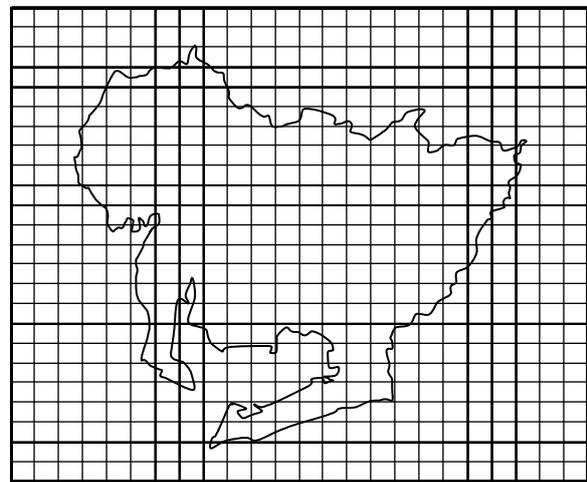
愛知県での確実な報告は、北設楽郡豊根村（茶臼山、坂宇場）、旧稲武町（現豊田市大野瀬町三国山池ヶ平牧場付近）のみである。このほか、豊田市滝脇町からトラップにかかったという個体が報告されているが、同定者が不明、標本も現存せず、保留としたい（高橋・村瀬, 2007）。

近隣の岐阜県東濃地方の低山地からはいくつかの報告があり、可児市久久利（標高 100m）から中津川市根ノ上高原（約 900m）付近までの丘陵地の湿地周辺の草原から記録されている。この地に隣接する愛知県の丘陵地や旧作手村などの三河高原からはこれまでに見出されていない。

北海道と本州に分布。北海道では平野部に広く生息する。本州では、東北地方から山口県まで山地に分布する。近畿地方には広い分布空白地がある。東濃地方の低標高の産地は例外的である。

国外ではヨーロッパから日本までユーラシア大陸に分布する。しかし、すべて同一種かについては今後の検討が必要である。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

一般に明るく広いススキが多い草原を好む。北海道では路傍などの草地にも生息する。愛知県や岐阜県では湿原との結び付きが強く、同様な傾向は中国山地でもみられる。これらの産地ではヒメヒカゲ、ゴマシジミとともに産すところが多い。本州中部の産地は火山草原など乾燥しており、アカセセリの生息地と共通するところがある。年 1 回発生。東濃地方などの低標高の産地では 6 月上旬から発生し、中下旬が最盛期となる。豊田市三国山池ヶ平牧場跡地（標高約 1,000m）や茶臼山では、7 月上旬から発生し始め、8 月末までみられる。♀はやや遅れて羽化する。天気の良い時に、明るい草原上に敏捷に飛び、各種の草花を訪れる。各種のイネ科植物に産卵し、中齢幼虫で越冬する。越冬後の老熟幼虫はススキから見出されることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

愛知県では、1951年に茶臼山で始めて記録されて以来、1957～1970年に北設楽郡豊根村の一部の地で少数の記録があるに過ぎなかったが、1993年7月に北設楽郡稲武町（現豊田市大野瀬町）池ヶ平牧場跡地で新たに生息が報告され、2006年7月4日に数頭を採集確認した（高橋昭・田中蕃, 未発表）。この産地は、牧場の跡地の明るいなだらかな草原で、ところどころに湿原が混じっている。一部、ハングライダーの練習場に使用されている所がある。しかし、周辺から灌木が進入しており、また道路の工事が進行中であるなど、草原の存続が危惧される。愛知県に接する岐阜県東濃地方では、湿地を生息地としていたが、道路、住宅地に変わり、2000年以降本種はほとんど見られなくなった。この現象は湿地、またはその周辺に好んで発生していたヒメヒカゲ、ウラナミジャノメ、ゴマシジミの減少と共通する。長野県では、草原の森林化が本種の現減少の原因とされる。愛知県でも同様な危険性が充分ある。

【保全上の留意点】

生息地の保全が最も重要である。草地は、スキー場などとして管理される場合にはむしろ望ましいことがあるが、殺虫剤などの使用に際しては、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

自然状態での産卵植物、幼虫、蛹の観察例は日本全体でもごく少ない。愛知県では、まだこれらの観察例がない。

【引用文献】

高橋 昭・村瀬卓平, 2007. 愛知・長野県境茶臼山のコキマダラセセリ. 蝶研フィールド, 22 (4): 16-17.

スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus* (Butler)

【選定理由】

本種が愛知県で最初に発見されたのは1951年8月2日茶臼山からであった。その後三河山地から若干の報告があったが、1990年代に入り、記録が途絶えた。近隣の岐阜県や長野県においても、近年急速に個体数が減少しており、この傾向は全日本的である。

【形態】

前翅長ほぼ12mmの小型のセセリチョウ。翅の裏面はほぼ黄褐色で翅脈が黒い線となる。翅表の斑紋は♂♀で大きく異なる。♂は赤みを帯びた橙色で、前翅の外縁および後翅の外縁と前縁が黒く縁取られる。♀は地色がやや暗く、前翅に基部と中室外方に暗褐色紋をもつ。本種の♂は、斑紋から同定は容易であるが、♀は同属のヘリグロチャバネセセリの♂♀に極めてよく似ており、その区別は熟練を要する。飛び古びた個体ではしばしば区別が困難となる。また、ヒメキマダラセセリと誤認されることも少なくない。これらの3種は、翅の裏面が一樣に橙色で、翅脈が細い黒線となる共通点があるので区別には注意する。

【分布の概要】

愛知県では、北設楽郡豊根村、設楽町、旧稲武町黒田貯水池（現豊田市小田木町）、旧足助町大多賀（現豊田市大多賀町）から記録された（高橋，1974）。

本種は北海道南部、本州、四国西部、九州に分布し、産地は局地的。関東以西では山地に草原に限って発生する。近畿地方には大きな分布空白地がある。四国の産地は海岸に近く、例外的である。

国外では、朝鮮半島から中国にかけて分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

関東や中部地方、九州などでは、明るい山地草原に多く見られる。木曾、東濃、愛知県などでは、山間の明るい草地、林道脇にも発生するが、局所性が強い。敏捷に飛び、飛行中は見失いやすいが、ヒメジョオンやアザミ類など各種の草本の花を訪れ吸蜜するので、このときは目に付きやすい。年1回発生、1985年旧稲武町黒田貯水池（現豊田市小田木町）付近での観察では7月29日から8月17日までみられ、8月上旬が最盛期とされた（吉田，1986）。ヘリグロチャバネセセリとの混生地では、スジグロチャバネセセリは1週間ほど発生が遅い。

枯れたヤマカモジグサ、ヒメノガリヤスなどのイネ科食草植物に産卵し、孵化した幼虫はそのまま越冬、翌春から摂食し始め、初夏に蛹となる。愛知県では、卵や幼虫は発見されたことがない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1990年代から記録が激減、2000年代には記録されていない。長野県でも、ホシチャバネセセリ、チャマダラセセリとともにもっとも減少が著しいセセリチョウである。草原が森林化した生息地では原因が明らかであるが、生息地の景観に大きな変化がみられなくても激減している。ヘリグロチャバネセセリとの混生地では、スジグロチャバネセセリの減少が著しい。ホシチャバネセセリとともに減少の原因は不明である。

【保全上の留意点】

原因が不明であり、保全の対策が立てがたい。草地の保全、森林化の防止が求められる。耕作地に近い産地では殺虫剤の散布に注意が必要である。

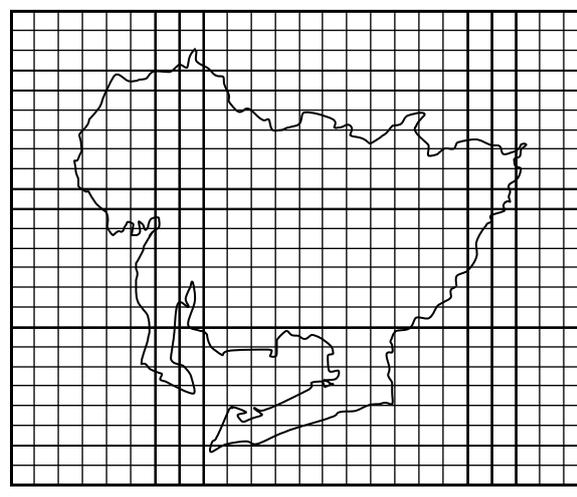
【特記事項】

近似種のヘリグロチャバネセセリの愛知県での採集記録は、1963年8月16日に旧稲武町下黒田と黒田ダムとの間という記録、および旧東加茂郡旭村（現豊田市）で1967年6月21日1♂採集、多数目撃という記録がある。ともに標本が現存せず、種々の観点から同定に疑義が残る。その後の調査でもヘリグロチャバネセセリは確認できない。今回ヘリグロチャバネセセリは愛知県からの正確な記録がない種として扱った。

【引用文献】

- 高橋 昭，1974. スジグロチャバネセセリとヘリグロチャバネセセリ. 一名古屋地方の分布とスジグロチャバネセセリの産卵と越冬態の観察. 佳香蝶, 26 (100): 69-72.
吉田正樹，1986. 黒田貯水池付近におけるセセリチョウ科6種の発生と訪花植物について. 佳香蝶, 38 (147): 41-46.

県内分布図



ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi* (Janson)

【選定理由】

愛知県では、豊田市（旧旭町）で 1998 年に初めて確認された（陸, 2000）。近隣の生息地の長野県南部からの飛来個体ではないと判断されたこと、その後、産地もいくつか新しく発見されたが、いずれの産地も発生個体数が多くはないこと、また、特異な生活様式を有している（幼虫は、コナラなどの新芽とアブラムシやカイガラムシ類を食べて成長する）ことなどから、今回、本種は新たに絶滅危惧種として評価された。

【形態】

地色は朱赤色で、日本産のミドリシジミ亜族のなかでもその朱赤は際立っている。裏面の斑紋は、暗褐色の長短のすじがあり、♂♀同じである。♂の翅表はふつう無紋、♀は前翅端より外縁にかけて黒帯をあらわすが、その強さは個体によって変異が大きい。

【分布の概要】

【県内の分布】

今回の調査により、豊田市（旧旭町）では、再記録されると共に、豊根村（旧豊根村）での生息が新たに明らかになった。各産地とも個体数は少なく、合わせて 10 頭ほどが確認されている。

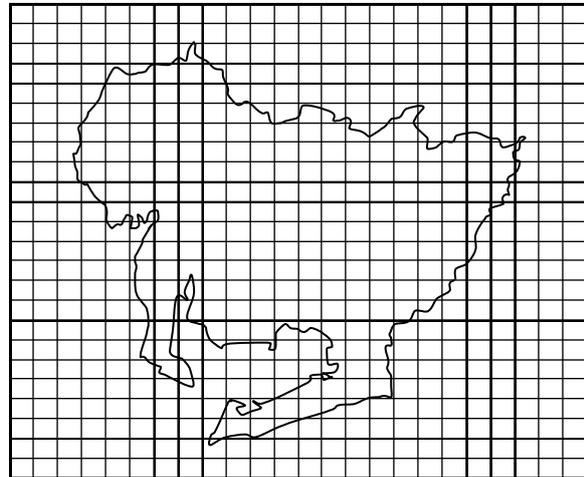
【国内の分布】

北海道、本州に分布する。四国、九州には分布しない。関東北部から中部地方の山地帯にかけて産地が多いが、その発生地はきわめて局地的である。

【世界の分布】

朝鮮半島、ロシア南東部、中国東北部に分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

今回の調査で判明した個体は、中標高地の二次林の林縁で採集・確認されている。

朱赤色のミドリシジミ亜族のなかではもっとも発生が遅く、年 1 回、7 月中旬ごろに発生、8 月にも新鮮な個体が多くみられることもある。卵で越冬するが、樹幹の亀裂部や褶曲部に 1 個ずつ産み付けられるため野外における卵の発見は容易ではない。

本種と共生するアリ（クサアリモドキ・クロクサアリ・フジボソクサアリなどが知られている）との関係、産卵植物（コナラ・アベマキ・クリあるいはブナ科以外の植物）の究明が待たれる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

生息地は草原に続く山間地の落葉樹主体の二次林の林縁である。植生の遷移と繁茂が進み生息環境としては良好ではない。10 頭程度が確認されているが、今後の増減に関しては更なるデータの積み上げが必要不可欠である。モデルケースとして植生の遷移、アリとの共生関係、アブラムシやカイガラムシとの関係、アリの移動などの継続的なモニタリングが望まれる。アリとの関係で生息地は限られると思われるが、条件を整えば多数の個体が発生する可能性がある。

【保全上の留意点】

産卵木の調査、アリとの共生状況の観察などと並行して、試験的な間伐を行うなど、安定した個体数維持のためのデータ集積に努めるのが望ましい。

【引用文献】

陸 雄一ほか, 2000. 愛知県でムモンアカシジミを採集. 佳香蝶, 47 (201): 24.

【関連文献】

浜 栄一ほか, 1996. ムモンアカシジミ. 信州の蝶: 144-145. 信濃毎日新聞社, 長野.
白水 隆, 2006. ムモンアカシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 94. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 250. (財)旭高原自然活用村協会.

フジミドリシジミ *Shibatanozephyrus fujisanus* (Matsumura)

【選定理由】

本県では、1971年に豊田市（旧稲武町）で始めて記録された（佐藤，1972）。本種は、ブナ・イヌブナ林に依存して生息する。本県の場合、食樹のブナ・イヌブナが生育しているのは長野県境に接する豊根村（旧豊根村・旧富山村）・設楽町（旧設楽町・旧津具村）・豊田市（旧稲武町）の一部に限られるため、本種の生息地も限られ、その個体数も決して多くはない。かつて多数飛翔していた面ノ木峠や裏谷周辺でもブナの減少、殊に産卵に適した低木やひこばえの減少などのため、最近、産卵数や成虫の発生数が顕著に減り始めている。

【形態】

前翅長は18mm程度。裏面の斑紋は♂♀の大差はない。♂の表翅は金属光沢のある青色、♀は一樣な暗褐色で斑紋がない。裏面の斑紋が特異であることにより容易に近似種とは区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町、旧足助町）、設楽町（旧設楽町、旧津具村）、豊根村（旧豊根村、旧富山村）などのブナ・イヌブナ林に生息する（高橋昭ほか，1991；大曾根，2005；故田中蕃，私信）。本県では、ブナ・イヌブナ林が少ないため本種の分布も極めて限られている。なお、豊田市（旧旭町）牛地の駒山のブナ生育地を1999年に調査しているが本種を確認できなかった。

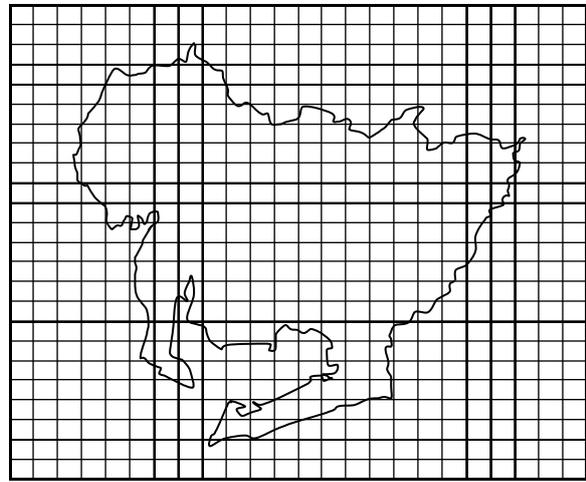
【国内の分布】

北海道（渡島半島や奥尻島など）、本州、四国、九州に分布する。山地に産するが、個体数は少ない。九州では、ブナ・イヌブナの生育する山地帯に産地がある。

【世界の分布】

日本固有種である。なお、台湾北部と中国（陝西省・四川省・貴州省）には、本種の代替関係にあるとされている種が、最近発見されている（小岩屋，2007）。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

年1回、6～7月に発生。本県では、高標高地のブナ・イヌブナ林で6月中旬頃に発生盛期が認められる。生き残りの♀は8月下旬まで観察される。

♂は午後になると樹上で占有行動をとる。また、早朝にブナ林をうねるように飛翔する♂も見られる。卵で越冬する。成虫の大きさに比べて卵は大きく白いのでよく目立つ。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつて食樹が多数生育していた面ノ木峠・天狗棚・裏谷周辺は遊歩道の整備により、また、富山村などは伐採や植樹により本種の生息環境が変化し産卵数や個体数の減少となっている（大曾根，2005）。その他の地区でも混交林の繁茂が進み個体数が減少している。

県外近隣の産地として、三重県鈴鹿山脈の御在所岳以北、岐阜県では、上石津町・揖斐郡北部・恵那山麓、清内路峠などで記録がある。

【保全上の留意点】

生息地の混交林を含めた定期的な間伐などが必要である。本種に代表されるブナ林の生態系は本県では限られた地域にしか残存していないので、可能な限り生態系をより広く維持・管理することが望まれる。

【特記事項】

早朝や強風のあと多数の個体が、下草に止まっていることがある。

【引用文献】

- 小岩屋 敏，2007. 182. フジミドリシジミ. 世界のゼフィルス大図鑑解説編: 283-284. むし社，東京。
大曾根 剛，2005. 愛知県のフジミドリシジミの分布資料. 佳香蝶, 57 (223): 41-43.
佐藤純彦，1972. 愛知県北設楽郡でフジミドリシジミを採集. 佳香蝶, 24 (90): 4.
高橋 昭ほか，1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 50. 愛知県.

【関連文献】

- 白水 隆，2006. フジミドリシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 107. 学習研究社，東京。
巢瀬 司ほか，2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会，東京。

クロツバメシジミ *Tongeia fischeri* (Eversmann)

【選定理由】

本県では、1970年に旧鳳来町河合で初めて発見されている(鈴木, 1973)。食草ツメレンゲ(ベンケソウ科)に依存して発生している本種は、県北東部の新城市(旧鳳来町)大島川上流、豊根村(旧豊根村、旧富山村)などの限られた地域にしか生息していない。その大島川流域のツメレンゲは、ダム工事に伴い大部分が消失した。その際一部が小学校の石垣に移植され、廃校に伴い民家の石垣へ再移植されている。2008年の現地調査の結果、住民の保護のもとに本種は、細々と生息していることが確認された。

【形態】

前翅長 12mm 程度で尾状突起をもつ小型のシジミチョウである。♂♀ともに翅表は黒褐色、翅裏は淡褐色で小黑点がある。♀は、僅かに翅形の丸みが強い。市街地にも普通に産するツバメシジミによく似るが、翅裏がより暗色で、小黑点の数が多く、♂でも翅表が黒褐色であることで容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村(旧豊根村、旧富山村)、東栄町、新城市(旧鳳来町)に記録がある。

【国内の分布】

大きく分けると、関東・中部地方の分布域、近畿地方から山口県の瀬戸内海側と四国・九州内陸部の分布域、対馬を含む九州地方の分布域の3つがある。生息地は西日本に多い。

近県では、静岡県北西部、岐阜県高山市に産地がある。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、ロシア南部、モンゴルからウラルにかけて分布する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本種の幼虫の食草ツメレンゲの生育地は、山間地の岩場、露岩地、がれ場、人工の石垣など限られた特異な場所である。

成虫は、年3回(4月末～5月上旬、8月、9月末～10月上旬)発生している。幼虫は葉肉内に潜入、幼虫で越冬する。成虫は、生息地から遠く移動することは少ない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、大島川流域の岩場から知られていたが、ダム工事に伴い大部分が消失した。地元有志によってツメレンゲごと地元の小学校に移植され、ここで発生を繰り返していたが、この小学校も2002年より廃校となり、民家の石垣へ再移植が試みられ、住民の保護のもとに細々と生息している。新たに豊根村において生息が確認されている。

【保全上の留意点】

食草のツメレンゲの自生地の保全が急務である。大島川流域には、生息が可能と思われる環境がまだ残存しており、引き続き詳細な調査が望まれる。本種は、翅裏の色調・斑紋には地域差が知られているため、過度な採集の恐れもある。

【特記事項】

1999年に旧鳳来町は、食草を移植した小学校の石垣周辺を「七郷一色のクロツバメシジミ生息地」として天然記念物に指定している(横山, 2000)。食草のツメレンゲ自体も本県の準絶滅危惧種にランクされている。

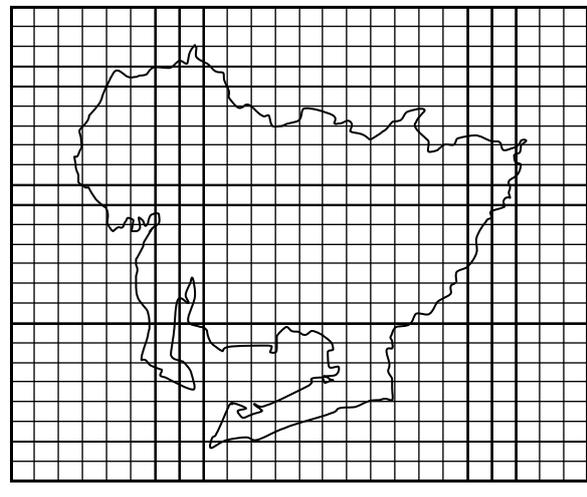
【引用文献】

鈴木友之, 1973. 愛知県で発見されたクロツバメシジミ. 三河の昆虫, (1): 2.
横山良哲, 2000. 鳳来町七郷一色のクロツバメシジミ生息地・町文化財(天然記念物)に指定. 鳳来寺山自然科学博物館報 29号: 35-36. 鳳来寺山自然科学博物館, 鳳来町.

【関連文献】

白水 隆, 2006. クロツバメシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 146-147. 学習研究社, 東京.
巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.
横山良哲, 2008. ほのか、ふるさとの心を結ぶ小さな蝶々. 広報しんしろ: 35. 新城市.

県内分布図



クロヒカゲモドキ *Lethe marginalis* Motschulsky

【選定理由】

愛知県の本種は、1937(?)年8月7日に鳳来寺山から初めて採集され、1938年に報告された。1951年には旧額田郡額田町石原(現岡崎市)と北設楽郡設楽町から記録され、以後三河山地から点々と成虫や幼虫が発見されたが、1999年の旧旭町(現豊田市上切町)の採集例以来確実な報告がない。近隣の岐阜県東濃地方や長野県木曾地方からも、最近の観察例が激減している。これは全日本的な現象と考えられる。

【形態】

前翅長、♂31、♀34mmのジャノメチョウ科。翅表は濃褐色、前翅の外半はやや淡色、後翅の外縁に沿って眼状紋が並ぶ。裏面は淡褐色で、前翅、後翅ともに外縁に眼状紋がある。近似種のクロヒカゲやヒカゲチョウに一見似るが、翅形が丸く、眼状紋が大きく目立つ。前翅の裏面の眼状紋は3個あり、このうち最も下の紋が最大であることから、クロヒカゲ、ヒカゲチョウと区別する。♂に♀に比し小型、ほのかな匂いがあることで区別できる。

【分布の概要】

愛知県からの記録はすべて三河で、尾張からは記録がない。既知産地は、岡崎市、豊田市、北設楽郡(東栄町、設楽町)、新城市など比較的産地の報告は多い。岡崎市では分布も広く、得られた個体数も少なくない(高橋ほか、1991)。

岐阜県東濃地方では、産地の報告が少なく、中津川市など東北部から記録されている。

本州、四国、九州に分布するが、東北地方からは最近の記録がない。いずれの産地でも局所的。国外では、朝鮮半島から中国に産する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

愛知県では、山間の部落周辺の林縁や谷筋の林道に沿った明るい疎林の周辺などに生息する。クロヒカゲが多産する暗い樹林内は好まない。飛び方はクロヒカゲよりも緩徐、樹液、落花、獣糞、湿地に飛来する。花で吸蜜することはない。♂は夕方になると枝の先端に止まり、占有行動をとる。

年1回の発生、6月下旬から発生し、9月まで見られる。愛知県では8月の記録が多い。チヂミザサ、ススキほか多くのイネ科に産卵、幼虫はこの葉を食べるが、食草として不適なものも多い。4~5齢幼虫で越冬し、翌春6~7齢に達し、蛹化、羽化する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1990年代に入り、野外で本種の成虫や幼虫をみかけることが激減した。年により発生の変動もあるらしい。里山の放置は本種の減少に拍車を掛けたものと思われる。減少の要因は愛知県のみならず、他府県でも明らかでない。

【保全上の留意点】

減少の要因が不明であり、根本的な対策を講じたい。林縁や林床にススキなどの自生する環境は保全する必要がある。路傍の草刈、農薬の散布も注意を払うべきである。

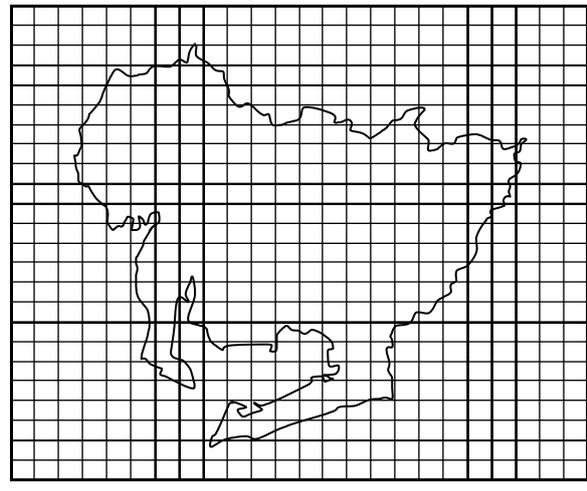
【特記事項】

本種は長野県や山梨県では、キマダラモドキと混生しているところが多い。愛知県では、これまでにキマダラモドキは、1978年に旧北設楽郡稲武町(現豊田市富永町)にある名古屋市野外学習センターで目撃された記録があるに過ぎない。それ以後も確認されていないので、愛知県の土着種から一応保留することとした。

【引用文献】

高橋 昭ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

県内分布図



ウラジャノメ *Lopinga achine achinoides* (Butler)

【選定理由】

本種は愛知県では1998年6月6日に北設楽郡旧富山村（現豊根村富山）の漆島川の道路脇の崖から4♂が初めて採集された（白井, 1998）。現在までにこれが唯一の記録である。近隣の岐阜県東濃地方からは記録がなく、本州中部の産地での最南端の貴重な記録であることから絶滅を守る必要がある。

【形態】

前翅長26mm程度。翅表はくすんだ灰褐色、外縁近くによく目立つ眼状紋がある。裏面は淡い灰褐色で翅表と同様の眼状紋があるほか、その紋列の内側に白い線がある。このような斑紋の特徴は近似種にはないことから同定は容易である。♀は♂よりもやや大きく、全体に色彩が淡く、眼状紋が大型となる。

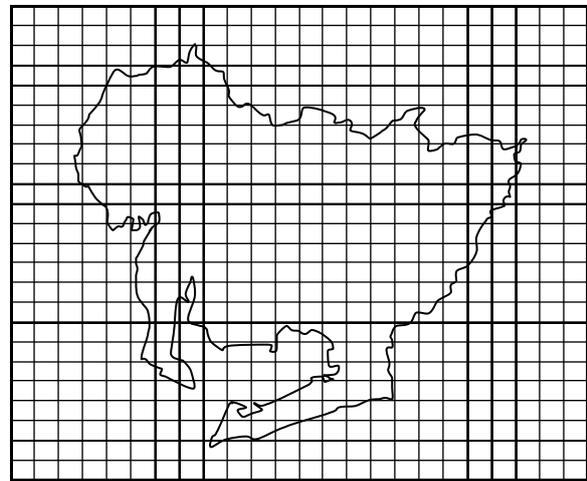
【分布の概要】

上述のように、愛知県では北設楽郡旧富山村（現豊根村富山）の漆島川溪谷が唯一の産地である。岐阜県東濃地方からは未知。長野県木曾郡では大桑村野尻が最南端の記録である。開田村（現木曾町）では比較的採集例が多い。

北海道（利尻島と道央～道東）と本州に分布、長野県を中心とした分布圏では産地が比較的普遍的で、個体数も多いが、それ以外では局地的。西日本では島根県と山口県の県境の恐羅漢山付近にみに生息する。このような特異な分布をしており、愛知県の記録は重要である。

国外では朝鮮半島からユーラシア大陸の北部に広く分布する。

県内分布図



【生息地の環境 / 生態的特性】

本種は、中部地方では、落葉広葉樹林帯の上部の比較的明るい針葉樹林や広葉樹林の林床に生息し、低山には生息しない。旧富山村の産地は標高約500mの溪谷で針葉樹林帯の中を林道が貫いており、路傍の崖地から採集された。中部地方の最南、かつ最低標高の記録である。

年1回の発生。中部地方では6月中旬から見られる。この点からも愛知県産はやや早い時期の採集例であり注目される。草地を低くゆるやかに飛び、下草の葉表によく止まる。花を訪れる習性は乏しい。長野県での観察によれば、産卵は7月、地上に放卵する習性がある。卵は10日ほどで孵化し、年内に3～4齢まで成長して越冬する。翌春冬眠から覚め摂食を開始し、老熟すると食草を離れ、蛹となる。愛知県では、幼生期の観察例はない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

本種が愛知県で発見された翌1999年6月13日に発見地を訪れたが、再確認できなかった（高橋, 未記録）。再調査が臨まれる。

【保全上の留意点】

崖地をコンクリートなどで表面を覆うなど控えることが望ましい。また樹林が切り開かれて明るくなくすぎても、また繁茂して暗くなり過ぎても生息できなくなるので注意が必要である。

【特記事項】

東北地方では宮城県と山形県の県境付近に生息するほかごく少数の産地しか報告がない。中国地方唯一の産地である恐羅漢山では標高1,346mの山頂付近にのみ生息する。ここは林床の草が乏しく、成虫は樹林の上を飛ぶ習性がある。

近似種のツマジロウラジャノメは愛知県からまだ発見されない。

【引用文献】

白井和伸, 1998. 愛知県富山村でウラジャノメを採集. 虫譜, 37 (1): 15.

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata* Butler

【選定理由】

愛知県の本種は、鳳来寺山から 1938 年に初めて報告されたが、しばらくの間採集例がなかった。戦後になってから、名古屋市や犬山市などから産地が見つかり（高橋, 1959）、局地的に多産する産地もいくつか知られた。これらの産地は、路傍の草地など平凡な自然環境のところもあるが、県下ではヒメヒカゲやハッチョウトンボを産する湿原との結びつきが強く、この傾向は岐阜県東濃地方や静岡県などとも共通する。最近では湿原が消滅するとともに本種も激減し、名古屋市内およびその周辺などではまったく見られなくなった。

【形態】

前翅長は、春型で約 20mm、夏型で約 18mm の小型のジャノメチョウ科。近似種のヒメウラナミジャノメに類似する。翅表は暗褐色で、前翅に 1 個、後翅に 1 個の眼状紋をもつ。

裏面は本属特有のさざなみ様の縞模様で、眼状紋が前翅に 1 個、後翅に 2 個ある。眼状紋の数は個体変異がある。ヒメウラナミジャノメが後翅裏面に通常 5 個あるのに対し、本種では、ほとんどの個体で 3 個、また一番上のものが最大であることから区別は容易である。早はみに比し、やや大きく、翅表の色彩が淡く、翅表の眼状紋の周囲の黄色の輪が広く明瞭である。春型に比して、夏型はやや小型となり、ヒメウラナミジャノメとほぼ同大となる。

【分布の概要】

愛知県では、西部の水田地帯や木曾川の堤防などから報告がない。犬山市、名古屋市、春日井市、瀬戸市、日進市、愛知郡長久手町、知多郡武豊町、豊田市、岡崎市、新城市などから知られる。北設楽郡などの山地からは報告がない。尾張や豊田市の産地は岐阜県東濃地方の産地と連なる。長野県木曾郡南部にも採集記録がある。

本州、四国、九州に分布する。一般にその産地は局地的。東限は神奈川県小田原市、北限は福井県南部青葉山付近。

国外では朝鮮半島、中国、台湾に産する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

愛知県や岐阜県東濃地方では、湿地、またはその周辺を生息地とするところが多く、これらの産地ではヒメヒカゲとほぼ同時に発生する。しかし、ごく平凡な路傍から得られることもある。静岡県西部では天竜川の堤防に多産する。このような堤防上の産地は愛知県では知られていない。ヒメウラナミジャノメよりは明るい環境を好む。

西南日本では通常年 2 回発生する。愛知県では第 2 化（夏型）は、東加茂郡旭町笹戸（現豊田市笹戸町、市平町）、旧南設楽郡海老町（現新城市海老）、旧守山区志段味町（現名古屋市守山区）、岡崎市、など 8 月下旬から 9 月中旬にわたる記録がある（高橋, 1961）。飼育では第 2 化は 8 月中旬から 9 月中旬にかけて羽化期の幅が大きい。成虫は草地を低く飛び、すぐ下草の葉上にとまる。訪花や、地面に止まる習性は乏しい。幼虫は各種のイネ科やカヤツリグサ科植物の葉を食べるが、野外での確認された食草は少ない。中齢幼虫で越冬する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋市周辺からはほとんど見られなくなった。尾張地方全体でも激減している。長野県南部の産地では絶滅したものと思われる。東三河では、最近の観察例も少なくない。この現象はヒメヒカゲによく似ており、減少の要因は発生地である湿地の壊滅的な減少と思われる。路傍の草地から幼虫を採集したことがあり、舗装などによる草地の減少が原因の可能性が大きい。

【保全上の留意点】

ヒメヒカゲと同様に発生地の保全が第一である。舗装や農薬散布なども最低に留めることが望まれる。

【特記事項】

本種の年 1 化か年 2 化かは、環境によるものか遺伝的なものかがなお明らかでない。

【引用文献】

高橋 昭, 1959. 守山市龍泉寺附近のウラナミジャノメ. 佳香蝶, 11 (40): 93.

高橋 昭, 1961. 愛知県東加茂郡旭村におけるウラナミジャノメ第 2 化の採集報告. 佳香蝶, 13 (48): 199-200.

県内分布図

